



アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳 注(3)

真下, 裕之(監修・訳注)

二宮, 文子(訳注)

和田, 郁子(訳注)

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 42:113-151

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008780>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008780>



アブル・ファズル著 『アーイーニ・アクバリー』 訳注 (3)

真下 裕之 監修
二宮 文子*、真下 裕之、和田 郁子** 訳注

<I, 39>

幸福なる寝所の規則

世界を飾る玉座着座者においては、溢れる思慮により、錦あやなすごとき意欲が生まれ、行為は然るべきところに及ぶ。虚像あふれる地には真理が満ち渡り、内実を明かす顔^{かんばせ}が開く。

それゆえ、偉大なる知者たちを本能の暗がりへと導いた、帷の者たちの数多さは、世界の主たる御方に対しては、見識の煌めきを強めた。そして【数多くの妻妾がいることは】執心を低めることによって、高い自由をもたらした。

ある選りすぐりのやり方で、居所の繁栄が実現し、家内は秩序を手にした。すなわちヒンドウスターンやその他の諸国の有力者たちに、求縁をなされたのである¹。かくのごとき和合の結束 (paywand-i yak-ġihat-ī) によって、世界の騒乱の場は安息を得た。そして洞察の煌めきによって、ご奉仕の外にある適任者たちを卑賤の土中から引き立て、高い地位を授けたのと同様に、内にある僕た

* 青山学院大学文学部准教授

** 京都大学白眉センター／人文科学研究所特定助教

1 ムガル帝国帝室とインド在来の有力者一族との婚姻関係については [Taft 1994]。(M)

ちに対しては明察によって、各々のほどに応じて地位を高からしめるのである。

短慮の者は、土混じりの金に純度の高まりが生じると考えるが、深慮の者は、【それが】妙薬 (iksīr) の働きであり、化学的な (kīmiyā) 作用であると知っている。不活性のものが成長によって別の様相に変わったり、銅や鉄が金になったり、錫や鉛が銀になったりするのが常なのだから、何でもない者どもを立派な人が一人前にしたとしても、どうして驚くことがあろうか。

対句

良き人々は何と見事にこの金言を述べたことか、

「高き人々の目は幸運の妙薬」と。²

秩序づけの資質をすべて挙げるならば、知慧の探究、深遠な洞察、等級の認知、価値の認識、仕事の愛好、そして忍耐である。<I, 40> 怒りに満ちているときには、急いで正常な状態に戻るべきである。好意の増大によって、評価を下すべきではない³。耳にしたことを深い見識によって判断すべきである。妄想の愛好を避けるべきである。人々からの称賛を大いなる天恵と見なすべきである。世界を破滅させる酒を知慧の美質に近づけるべきではない。

また、【皇帝陛下は】大きな区画をつくり、その中に心楽しませる居所をお建てになる。そして5000人を超える帷の者たちの一人ひとりについて、別々の居所を割当てなさる。【帷の者たちを】いくつかのグループに分けて、選んだつとめに傾注させなさる。純粋な性質の僕たちをそれぞれのグループのダルガ職と監督職 (dīdah-bānī) にお据えになる。性質が良く、貞節な気質の者たちのうちの一人を筆頭^{おもて}になさる。表 (birūnī) と同様に、宮内作業所が繁栄し、各人の日々の糧を応分に豊かにする。給付のほどは拙筆の能く記録し得るところではないが、【敢えて記すなら】各人の月給は最高位の婦人なら1610ルピーから

² 韻律は baḥr-i mutaḳārib-i sālim. + - - + - - + - - + - - (M)

³ Ms. A, Ms. B に従って、底本の 'GYRD' を 'NGYRD' と読み替えた。(M)

1027 ルピーまでであり⁴、御側付きの僕たちの一部には51 ルピーから20 ルピーまでである。40 ルピーから2 ルピーまでの者たちもいる。内廷 (*darbār-i hāṣṣ*) には、正確な筆で記し、つとめに服する監督者 (*mušrif*) を任命なさる。【その者は】奥 (*darūnī*) の収支について精通し、金品について記録する。この女性たちは、望むものについて、その月給のほどに応じて奥の出納係たち (*taḥwīl-dār-ān-i darūnī*) に請求する。覚書 (*yād-dāšt*) が【内廷の】敷居の監督者のところに届くと、表の宝庫番がそれを確認して【監督者に請求分を】委ねる⁵。この請求においては手形は振り出されない。【その書記は】年給の見積もりをして、まとめて受領証を書く。そして【その受領証には】王朝の朋輩らが捺印する。その後、この手続きのために特別に作られた大王の印章によって認可を得る。この文書に基づき財庫係長 (*ḥazānah-čī-yi kull*) はお金を表の出納係長 (*taḥwīl-dār-i kull-i birūnī*) に引き渡す。出納係長は自らの書記の書面にしたがって表の側の担当者たち⁶に渡す。そこから奥仕えの者たちに引き渡され、一時金とともに⁷手当に算入される。

幸運なる寝所の周囲を奥の側からは思慮深い純粋な女性たちが守る。特に宮

4 Blochmannはこの箇所を「1610から1028ルピーまで」と記すが、底本およびMs. A、Ms. Bいずれにおいても「1610 rūpayahから27まで」と書かれている[AA (Etr.): I, 46]。そのうえで、後述のより低い階級の人々の月給額の記述がいずれも大きい数値から小さい数値に並べられていることから、ここでは「1610 rūpayahから1027」と読む。(W)

5 Blochmannはこの部分について、「覚え書き」を「監督者」が「確認」として認めているが、原文の表現に従えば、「確認」の主体は「表の宝庫番」と解するべきである[AA (Etr.): I, 46]。(M)

6 ḥawālah-dār-ān. ḥawālah-dārあるいはḥawāl-dārは、同時代のデカン・ムスリム諸王国においては、地方の徴税を請け負うとともにその他の分野においても権力を揮った役職者を指し、同時代のヨーロッパ諸語史料では「総督（英語のgovernorに相当する役名）」で呼ばれた[和田2002; 和田2006]。しかし、ムガル帝国の史料においてはこの語の用例は稀であり、taḥṣīl-dār（徴税人）との関係も定かではない。ここではたんに仕事の割り当てを持つ者たちと見て「担当者たち」と訳す。(W)

7 Blochmannは'bā zar-i waqt'を「現行の相場で」と解釈しているが、本訳注では、手当 ('ulūfah)に加えて、折に触れて女性たちに支給される一時金と見なす[AA (Etr.): I, 46]。従来研究においても、後宮の女性たちがマンサブを与えられ、その位階に応じた給与を得るとともに、君主から贈り物や賜金を受けたことが知られる[Sharma 2009: 162-166]。(W)

廷の中では、雄弁で賢明な、貞節な女たちが侍る。扉の外側では、よき考えを持った宦官たちがご奉仕に待機している。また適切な距離において、忠節を選んだラージプートたちが警護をしている。その後方に、謹直を選んだ行い正しい帳守りたちが夜警 (*yatāq-dār-i*) にあたる。外側では四方をアミールたちとアハディーたちとその他の部隊が位階ごとに⁸護衛 (*kišk*⁹) にあたっている。

ベギムたちやアミールの妻たちやその他の貞淑な人々がお目見えの儀 (*kūrnīš*) という幸運によってお引き立ての榮譽を得ることを望むときはいつも、最初に奥仕えの者たちに知らされる。【彼女たちは】然るべく回答を得て、<I, 41> 自分の文書を宮廷の職員に送る。その文書に衷心が認められる限り、彼女たちは奥へと入れてもらえる。一方、高貴な人々の中には1ヶ月におよぶ賜暇を賜る者もある¹⁰。世界の王は正しき性質の番人たちの存在があっても、自身の深い用心を解かず、【ハレムへの出入りについて】完璧な注意を払う。

行軍中の居所の規則¹¹

全て【を記すのに】は困難が伴うが、狩りの際に用いられ、また近距離の旅の際に整えられるもののみを記し、見本を示す。

最初【に述べるべき】はグラールバル (*gulāl-bār*¹²) (ペルシア語のカーフに

8 本文にあるごとく、護衛の当番者は *mīr-i tūzuk* たちおよび *yasāwul* たちの差配によって、「階層・階級の違いに応じて」整列した [AIN: 1105]。(M)

9 ムガル帝国時代の史料において、ケシク *kišk* はチャウキー *čawkī* と同義であり [AA: I, 192; BNL: I, 152]、当番制による宮廷の護衛の任務を指した。その任務に当たる者は *kišk-dār* ないし *kišk-čī* (本訳注では「衛兵」とした)、および *čawkī-dār* (本訳注では「衛士」とした) と呼ばれた。(M)

10 Blochmann は、「まるひと月そこに留まる許可を賜る者もいる」と訳し、この文の主語は直前の文で奥へ入れてもらった女性たちのうちの「高貴な人々」であると解釈している [AA (Etr.): I, 47]。しかし、*ruḡṣat* が通常「賜暇」を意味する語であることから、ここでは「奥勤めからの賜暇」を得る高貴な人々もいる、と読む。(W)

11 Andrews は、ペルシア語原文にもとづく本節全文の新たな英語訳を提示している [Andrews 1999: II, 1277-1280]。(M)

12 *gulāl* はヒンディー語で「ホーリーの祝祭で用いられる赤色の粉」 [Platts 1884: 912] を、*bār* は「囲み」 [Platts 1884: 121] を意味する。後出するごとく、*gulāl-bār* は赤色の

ダンマ、ラームにアリフ、ラーム、バーにアリフ、ラー)【である】。驚くべき区画であり、世界の主人たる御方が用いる。その扉と門は非常に堅固であり、錠前と鍵で開閉される。【全体は】100ガズ¹³四方より小さくはない。その【中の】東の端には、54の区切り(ḥazānah¹⁴)を備えた2本柱の(dū-surugah¹⁵)謁見場(bār-gāh)が、長さ24ガズ、奥行き14ガズでしつらえられる。【謁見場の】中には大きな木製ラーワティー(čübīn-rāwaṭī¹⁶)が立てられ、その周りに他の帳とばりが追加される。それ【謁見場】に隣接して、二階建ての木製小屋(čübīn-kāḥī dū-āšyānah¹⁷)が設置され、それが全世界の主人たる御方の祈りの場となる。また、その上に登り、朝にお目見えの儀を行う。奥の僕たちは、許可(dastūr)が

布を張った帳であり、ここではそれによって囲われた区画を指している。gulāl-bārの色について特記した史料は管見の限り本書の他に知られないが、赤色が君主のテントの専用色であったことはAwrangzīb時代についてBernierが伝えており[Bernier: 381; Bernier (Jtr.): 333]、Ġahāngīrのテントが赤色であったとのTerryの所伝もこれに整合する[Terry: 329]。ムガル帝室に帰せられる赤色テントの稀少な残存例としては、ジョードブルのマハラジャ王家に伝来したものが知られている[Welch 1985: 252-256]。赤色の帳による区画とその内側にあるテント群は写本挿絵にも描かれており、「アクバルのランタンボール入城」(1590-95年頃製作。Victoria and Albert Museum 所蔵Akbar Nāmah 写本の挿絵)[Stronge 2002: 49]や「アマル・スィングの帰順を迎える王子フッラム」(1618年ごろ製作。Victoria and Albert Museum 所蔵Ġahāngīr Nāmah 写本の挿絵)[Stronge 2002: 125]に見られるごとくである。またgulāl-bārの語はAwrangzīb時代の史料にも言及が見え、これがdīwān-i ḥāṣṣに「隣接した」ものであること[MAI: 361]、輿(pālākī)に座乗して入場することが原則禁じられた区域であること[MAI: 461]が伝えられている。一方、1695年デカン遠征途上のAwrangzībの陣営を訪れたイタリア人CareriもGulalbarという語形に言及しており、この用語の通用を裏付けている[Careri: III, 153; Careri (Etr.): 217]。(M)

13 長さの単位であるガズについては[AA (Jtr.) (1): 113, n. 72]。(N)

14 詳しい様態は不明である。Blochmannはdivisionsと訳す[AA (Etr.): I, 47]。Andrewsは、この語にbayという訳語をあて、そこから布を垂らすことができる格間を指し、従ってこの数がテントに用いられた布の枚数も示した可能性が高いとしている[Andrews 1999: 885-886]。(N)

15 surugはテュルク語で柱を意味する[Clauson 1972: S-R-Ġ (suruk); Sanglāḥ: 173 (sūrūḡ)]。(N)

16 ラーワティーはテントの一種である。čübīn-rāwaṭīは後出[AA: I, 49; 本訳注143-144頁]。(N)

17 これについては「二階建て居館」として後出[AA: I, 49; 本訳注144頁]。(N) 二階建てのテントについて、本書以外に文献上の証拠は管見の限り知られないが、同時代の図像資料には在証できる(「アクバルのランタンボール入城」(Victoria and Albert Museum 所蔵Akbar Nāmah 写本の挿絵)[Stronge 2002: 49]) [Beach 1985: 40]。(M)

なければそこには入らない。その【グラールバールの】外には、特別の規則に従い、長さ10ガズ、奥行き6ガズの木製ラーワティー24帳が立てられ、それぞれが間仕切り(qanāt¹⁸)で分けられる。王朝の後宮の選良たちが、その中で交歓を得る。また、多くの天幕(hargāh¹⁹)やテント(haymah)がしつらえられ、特別な者たちに割り当てられる。金糸で刺繍された布、金欄、ビロードの日覆い(sāyah-bān²⁰)が華やかさを添える。それ【グラールバール】に隣接して、縦横60ガズの絨毯の帳(sarā-pardah²¹)が張られ、その中にいくつかのテントが用意される。それはオルドベグ²²やその他の敬虔なる女性たちの休息の場となる。

その【グラールバールの】外には、内廷(dawlat-hānah-yi hāṣṣ)まで、長さ150ガズ、幅100ガズの心楽しませる広場が整えられており、マフタービー(mahtābī)と呼ばれる。その両側には、昔からのやり方で²³小テント(sarāčah)が居並ぶ。2ガズ毎に、高さ6ガズの柱——1ガズが地中に埋められており、その先端には真鍮の円蓋飾り(qubbah)が載っている——が、外と内の2本の網で固定されている。見張り役たちが既に述べたやり方で守っている。その喜ばしき場の中には一つの台(ṣuffah)が作られており、その上を4本柱の露除け

18 イングランド王James 1世の使節であったThomas Roeに伴って、グジャラートに向かうĠahāngīrの陣営に随行したEdward Terryは、カナートを「赤いキャリコで作られており、一定の幅ごとに竹の骨で補強され、9フィートほどの高さに直立している」と描写している[Terry: 329]。(N) Bernierは、カナートが「インド更紗 indienne 一つまり大きな花瓶一杯の花をプリントした布—で裏を付けた丈夫な布」でできていたことを伝える[Bernier: 375; Bernier (Jtr.): 327] (上記引用文は[Bernier (Jtr.)]を一部改めたもの)。(M)

19 天幕(hargāh)は後出[AA: I, 50; 本訳注145頁]。(N)

20 日傘(sāyah-bān)は後出[AA: I, 45; 本訳注133頁]。(N)

21 帳(sarā-pardah)は後出[AA: I, 50; 本訳注145頁]。(N)

22 後宮の女性たちの中に設けられた役職と推察される。Humāyūn時代のオルドベグとして、Bībī Fāṭimahという女性を確認される。彼女は乳母(anagah)でもあり、Humāyūnによって、Ibrāhīm Mīrẓāの娘との婚姻の交渉の際に使者として派遣された。また、娘はAkbarの母方のおじMu'azzamの妻になっている。[THA: 73, 137-138, 141-143, 252-253; Beveridge 1902: 228]。(N)

23 原文は'bi-pīšīn namaṭ'である。Blochmannは'as before described'と訳している[AA (Etr.): I, 48]。しかし、Monseratteが「王は、宿営地を先祖の習慣に従って設定することを命じた[Monseratte (Jtr.): 66]」と記録していること、また「前述の通りに」とした場合にそれが指す内容が不明瞭であることから、「昔からのやり方で」と訳した。(N)

(namgīrah-yi čāhār-čūbah) が覆う。夜には国の主が <I, 42> 【そこに】 くつろいで座る。特別な者以外、面会はできない。また、グラールバールに隣接して、30 ガズ²⁴ の長布 (šiqqah) 12 枚で円形の囲みが作られる。その出入り口はこの空間 【gulāl-bār】 に開いており、その中には10 ガズの木製ラウティーと、40 の区切りを備えたザミン・ドゥーズ²⁵ が置かれる。12 ガズの覆い布 (šāmiyānah) 12 枚が、その上に影を落とす。【この場所は】 幾つかの間仕切りで分けられる。この区域 (ḥalwat-gāh) をイチュキ・ハーナ (īčkī-ḥānah²⁶) と呼ぶ。いずれの宮地においても、特別のあつらえの清健の館 (šīḥḥat-ḥānah) が一つ用意される。世界の主人たる御方は、清め所 (ṭahārat-ḥānah) をこの名で呼ぶのである²⁷。

²⁴ この「30 ガズ」という表現は、長布や幔幕の大きさを示すと考えられるが、後出の内廷を囲む帳についての記述から (注28)、恐らく布の幅を指す。その場合、この円形の空間の周囲は $30 \times 12 = 360$ ガズ、直径が約 120 ガズということになるだろう。(N)

²⁵ テントの一種。[AA: I, 49; 本訳注 144-145 頁] に後出。(N)

²⁶ 底本および Ms. A, Ms. B とともに ABČKY-ḥānah となっている [AA Ms. A: 21r/19; AA Ms. B: 18r/13]。2 種の石版本のうち、デリー版では二番目の文字にヌクタが付されていないが、ラクナウ版は īčkī-ḥānah (近習の館) としている [AA D: 33; AA L: 45]。本訳注では、この語形を採った。īčkī は、ティムール朝において、官職を持たず個人的関係によって君主に仕えた人々であり、君主の個人的護衛などを務めた。ペルシア語の muqarrab が同義語とされる。彼らは君主のイエの一員と見なされ、またしばしば君主自身との乳兄弟関係あるいは王族との婚姻関係にあった。例えば、チャガタイ語文学者として名高い Mīr 'Alī Šīr は Sulṭān Ḥusayn の īčkī であり乳兄弟である [Ando 1992: 50-51; Subtelny 2007: 34-35, 68, 90, 134]。この語が īčkī-ḥānah ならば、ムガル帝国はこのようなティムール朝の近習制度をある程度継承していた可能性がある。なお Blochmann は 'Ibachkī' と読むが、訳は与えられていない [AA (Etr.): I, 48]。Andrews は、この語をトルコ語で抑制・恥を意味する 'iba' と、忍耐を意味する 'chek (mak)' を組み合わせた 'Ibachakī' と解釈し、'Modesty Room' と訳している。また、ペルシア語で āb-chak (水が滴る) という意味であるという Bivar の説を、同様の意味傾向を持つ解釈として紹介している [Andrews 1999: 888]。(N) *Bābur Nāmāh* では随所に Bābur 所属の īčkī を見だせる [BN: 78 et pass.; BN (Jtr.): 96 et pass.]。即位後間もない Humāyūn のもとにも īčkī が見えるが [QH: 57, 62]、'近臣' muqarrab たちと同格の「地位ある (šāḥib-i manāšib) īčkī たち」と「残りの (sāyir) īčkī たち」という区分も伝えられており [QH: 44]、何らかの序列を伴う制度の運用が行われていたことがうかがわれる。(M)

²⁷ 清健の館 (šīḥḥat-ḥānah) あるいは清め所 (ṭahārat-ḥānah) については、他の同時代史料ではその存在を確認できていない。類義語でその存在が Akbar 時代から確認できるのは沐浴所 (ḡusl-ḥānah) である。Lāhawarī によると、Akbar 時代の沐浴所は謁見場など政務が行われる場所 (dīwān-ḥānah) とハレム (maškū) の間にあり、一部の随臣が謁見を行ったり、またディーワーンやバフシが政務を行ったという。Šāh Jahān 時代には、沐浴所にはハンマームが併設されていた [BNL: I, 147-148]。Roe は、午後 8 時

それ【マフタービー】に隣接して、36ガズの方形の長布16枚から成る、縦横150ガズの絨毯の帳がしつらえられる²⁸。昔からの要領で、柱と円蓋飾りが据えられる。その中に、敷物1000枚分の大謁見場が整えられる。72の区切りを備え、その柱(suruḡ)は高さ15ガズである。その上にカランダリー(qalandarī)がたてられる。【カランダリーは】テントのように、ロウ引きの布やそれ以外のもので、より軽く作られ、上に差しかけられるもので、雨や熱暑の際に役に立つ。その【カランダリーの】周りに、12ガズの覆い布50枚が影を作る。この内廷にも、扉と門がある。有力なアミールや軍の貴顕たちを、バフシが命令を得て通す。毎月初めに、謁見の許可(dastūr-i bār²⁹)が更新される。【謁見場は】内も外も華やかな絨毯で飾られ、驚くべき花園のようになっている³⁰。

にGazelcan (Roeは'a faire Court'と表現している)と呼ばれる場所で王と近臣たちが会談を行い、その中には石で作られた玉座が置かれていたと伝える。Roeに同行していたTerryも'Goozalcan'での夜の面談の様子を伝えている[Roe: I, 106-107, 145]。また、BernierによるAurangzīb時代の宿営地に関する記録では、「沐浴所」(Gossle-kané)において夕方の御前公事が行われると記されている[Bernier: 375; Bernier (Jtr.): 328]。これらの機能は、単なる沐浴所の機能を明らかに超えている。一方、本文中では、「マフタービー」に設置された台にAkbarが夜に座り、特別なものと面会するという記述、「マフタービー」には「清健の館」あるいは「清め所」が設置されるという記述は見えるが、「清健の館」自体で面会が行われるという記述はない。これらの描写や機能、さらに次注で検討する位置関係を総合すると、「清健の館」は、内廷とgulāl-bārの中間のmahtābīに配置されたのではないかと推察される。もう一つの可能性は、ičkī-hānahの内部に配置されたというものである。(N)

28 この帳は正方形なので、1辺あたり4枚で合計16枚の長布を使用したと見られる。その場合、1辺の長さは $36 \times 4 = 144$ となり、150ガズの近似値である。(N)

29 dastūrを本訳注は字義通り「許可」としたが、Blochmannは'the list of officers eligible for admission'と解している[AA (Etr.): I, 48]。(M)

30 以上の宿営地内の各区画とその中のテントの配置は、王の私的空間から公的空間へ向かう順番で説明されている。一方、王の宿営地について最も包括的な記録を残したBernierによると、Aurangzīb時代のテントの配置は公的空間から王の私的空間に向かう順番で以下の通りである(引用は和訳に基づく)。「この囲い地のなかに立てるテントのうち、最初が一番大きいものは、アーム・カース(Am-Kas)と呼ばれます。【中略】最初のものにほとんど劣らぬ大きさの二番目のものは、囲い地の少し奥にあり、グスル・カーナ(Gossle-kané)と呼ばれます。【中略】三番目のテントは、先の二つより小さく、囲い地の中の更に奥にあり、カルヴァト・カーナ(Kalvet-kané)と呼ばれます。【中略】更に奥に王の私用のテントがあります。【中略】王のテントに付随して、ペーガムつまり王女や、その他後宮の高級女官や、大官のテントがあります[Bernier: 375-376; Bernier (Jtr.): 328-329]。また、それぞれの区画の機能については、アーム・カースでは朝に、グスル・カーナでは夕方に全ての貴族が集まり御前会議が開かれ、カル

この【内廷の】外側には350ガズにわたって綱が張られ、3ガズ毎に柱がしっかりと立てられる。その周りには、兵士が見張りとして立つ。これが外廷 (dīwān-hānah-yi 'āmm) である。全ての方位から、衛兵 (kišik-dār) たちが昔からの要領で³¹注意を払っている。この喜ばしき場の端から、60ガズの綱12本分の距離に楽士所 (naqqār-hānah) が置かれる。その間にはアーカース・ディーヤ (ākās-diyah)³² が置かれる。

【上で】説明されたものは複数揃いが、持ち運びされる。そして居所の管理

ヴァト・カーナには限られた位の高いウラマーしか入れず、そこで帝国の最重要事が行われる、と伝えられる。この記述を本文と照らし合わせると、名称に食い違いが見られるものの、アーム・ハースが内廷、グスル・カーナが *mahtābī* に設置された台あるいは「清健の館」、カルヴァト・カーナが *īckī-hānah*、王の私用のテントが *gulāl-bār* に設置された謁見所あるいは木製小屋という対応関係が導き出される。また、同じく *Awrangzīb* の宿営地を訪れた *Careri* は、宿営地の最初の区画には二つの扉があり、ケトルドラムやトランペットなどが置かれたテントがあること、次の区画は手のひら10個分の高さの彩色された布で囲まれていること、それに隣接して2本柱で支えられた赤地のテントがたてられていること、*Careri* 自身がそのテントに通されて *Awrangzīb* と面会したことを記録している。2本柱のテントの中には、低い柵を備え絨毯が敷き詰められた正方形の台があり、その奥のさらに高くなった場所に4本柱の屋根を備えた玉座があったと描写されている [*Careri*: III, 158-160; *Careri* (Etr.): 219-220]。最初の部分は「楽士所」を備えた外廷、二番目の部分は内廷と推察される。最後の2本柱のテントの部分は本文の *Gulāl-bār* に建てられたテントの描写に対応しているように読めるが、ならば *Careri* の描写では、*mahtābī* やそこに建てられたテントと、*īckī-hānah* (Bernierのカルヴァト・ハーナ) が脱落しているということになるだろう。これらの記録は、ムガル帝国では最盛期を通じて宿営地の配置や構造に大きな変化がなかったことを示していると考えられる。(N)

31 *bi-pīšm dastūr*. 注23を参照。(N)

32 アーカース・ディーヤは [AA: I, 45; 本訳注132頁] に後出。これについては Bernier が詳細な観察を残している。「この *aguacy-dié* は船のマストのようなものですが、とても細く三つの部分に解体することができ、本営の側のナガール・カーナと呼ばれるテントの近くに立てられます。夜はてっぺんに角燈を張り、一晩じゅう灯りが点いています。遠くから見えますからこれは大変便利です。迷った時に向かうのはここで、ここからバザールに戻って道を尋ねるか、あるいはここで一夜を過ごします。というのも誰も邪魔しませんし、泥棒からも安全です。これが *aguacy-dié* と呼ばれます。いわば天の灯りです。遠くからだとか何だか星のように見えますから。」[Bernier: 383; Bernier (Jtr.): 334-335] (上記引用文は [Bernier (Jtr.):] を一部改めたもの)。Monseratte も同様の灯火について記録している「(宿営地の前方に) 夜には高い柱の上に燃えるたいまつがかかげられる。迷う者のないように道しるべにするためである。もし、宿営地の中で何か反乱が生じた時には、だれでもたいまつ所へかけつける。このたいまつが宿営地の中心であるかのようである」[Monseratte (Jtr.): 67]。(M)

者たち (mīr-ān-i manzil) の選んだ地点に、鮮やかな手先の天幕係たち (farrāš-ān) が【その揃いのうちの】一箇を設置する。また別【の揃い】を先行させて、設営し、至高の来臨を待つ³³。いずれも、象100頭、ラクダ500頭、荷車400台、担ぎ人100名が運ぶ。そして maṣṣab-dār と aḥādī とその他の500騎、およびイーラーン人、トゥーラーン人、ヒンド人の天幕係1000名、土工500名、水運び人100名、大工・テント縫製係・松明係50名、革縫製係30名、清掃係150名が常に勤務している。歩兵 (piyādah) の月給は240ダームから130ダームまでである。<I, 43>

オールドが設営される際の規則³⁴

世界の主人が部隊の召集をいかに少なくなさっても、戦役が行われている方面ではいずれも、ますます多くの常勝軍が、神佑によって護られた鎧に随行する。もっとも、各地方に属する者の多くが諸々のために退き、同行の指令を受けることはないのだが。【それでも】軍団の群参と兵团の群集のせいで、部隊が

33 君主の本隊に先行する部隊ないしその陣営は、pīš ḥānah という用語で、ムガル帝国時代の文献に頻出する (例えば [HN: 37]; [TA: II, 263]; [AN: III, 341; III, 617; III, 698; III, 779]; [JN: (A) 55/ (T) 67; (A) 166/ (T) 192]; [AIN: 764; 815; 845; 936; 977] など)。pīš ḥānah と本隊との間隔は、1582年初、Akbar が「従来、pīš ḥānah が⁴ 6 kurūh 以上は先行しなかったが、ここからは少なくとも6 kurūh 先行するように」命じた [AN: III, 341] ことによって、おおよそ想像できる。また1580年から1582年まで Akbar の宮廷に滞在したイエズス会士 Monserrate は、1581年2月に発動された Mīrẓā Ḥakīm 討伐のための親征に随伴した際、その軍営についての記録の中で pīš ḥānah (Pexqhanaa) に言及して、「これは前方の家である hoc est anterior domus」と解説している (日本語訳が「主要な家」と訳しているのは誤りである) [Monserrate: 579; Monserrate (Jtr.): 66]。さらに1663年2月25日付けラホール発の Merveilles 宛書簡で Bernier は Awrangzīb の軍営について詳しく描写しており、Peiche-kané については「王が行幸するときは野営地は常に二つあります。別々のテント群が二つという意味です。王が一方の陣をたたんで出発する時、もう一方は一日先んじていて、野営に定められた場所に王が到着する頃にはすっかり用意ができていようようにするためです。そのために、これらのテントは、ペーシュ・カーナ、いわば先立つ家と呼ばれます」としている [Bernier: 374; Bernier (Jtr.): 327]。 (M)

34 Andrews は、ペルシア語原文にもとづく本節全文の新たな英語訳を提示している [Andrews 1999: II, 1280-1281]。 (M)

互いの営地を見分けられないという状況さえ生じていたために、事情に通ぜぬ者がいったいどんな目に遭うかも知れぬほどであった。【そこで】世界の主人たる御方は見識の煌めきによって選りすぐりの方法を創出せしめ、兵員たちの集団はいずれも安らぎを得たのである。

すでに述べたとおりの長さ 1530 ガズの心楽ませる一筆の場所には、幸福なる寝所、内廷・外廷 (*dawlat-ḥānah-hā*)、楽士所が設けられる³⁵。そのうえで、【その一筆の場所の】右側・左側・後方は 300 ガズ が空けておかれる。衛兵の他はそこを通ることができない。そのあいだには、100 ガズ の距離をおいて中軍の方にマルヤム・マカーニー (*Maryam Makānī*³⁶) およびグルバダン・ベギム (*Gul-badan Bīgim*³⁷) その他の性質純粹なる御方たち、そして王子ダーニヤール (*Dāniyāl*³⁸) が場所を占める。また【100 ガズ の距離をおいて】右には王子スルターン・サリーム (*Sulṭān Salīm*³⁹) が、【100 ガズの距離をおいて】左には王子シャー・ムラード (*Šāh Murād*⁴⁰) が幕営する⁴¹。そのうえで、少し距離をおいて

35 前節で述べられたテント群の長さの寸法を、その東端から以下のように加算すると 1530 gaz という数値が得られる。オールドベグの帳 60 gaz + gulāl-bār 100 gaz + mahtābī 150 gaz + 内廷 150 gaz + 外廷 350 gaz + Ākās-dīyah を経て楽士所まで 720 gaz。(M)

36 Akbar の母 Ḥamīdah Bānū Bīgim (d. 1604)。(M)

37 Bābur の娘 (c. 1523-1603)。Humāyūn の異母妹であり、同腹の兄に Hindāl がいる。1575 年メッカ巡礼に出発し、1582 年に帰着した。その後 Akbar の命により、Bābur および Humāyūn 時代の事績を扱う歴史書 *Humāyūn Nāmah* を著した。著作の時期は不明だが、同書が Akbar 時代の修史事業と密接な関連を持つことは明らかである。1591 年に完成した Bāyazīd Bayāt の歴史書 (THA) の写しの一つが Gul-badan Bīgim に贈られていたこともこのことを裏付ける材料である [THA: 377]。彼女が本書において Akbar の母后とともに宮廷の女性の代表者として特記された理由は特定できないが、この母后とともに Akbar からの恵を受けたり (1583 年 [MT: II, 322])、Akbar 一行を追って Kābul に到着した母后に同行する女性たちの代表者として言及されたり (1589 年 [AN: III, 568]) している事実は、本書の記述をある程度は文脈づけてくれる。本書成立後の 1602 年、Akbar の不興を買った王子 Salīm について、母后とともに取りなしの労を執ったことが、死去以前の Gul-badan Bīgim について記録される最後の事績である [TAN: 815]。(M)

38 Akbar の三男 (1572-1605)。(M)

39 Akbar の長男にして、後の第 4 代君主 Ḡahāngīr (1569-1627; r. 1605-1627)。(M)

40 Akbar の次男 (1570-1599)。(M)

41 本文がいずれの時点における Akbar の陣営を叙述したものであるかは、以下のごとくおおよそ導ける。3 王子が Akbar の陣営に揃い得た時期は 1591 年 9 月末が下限である。この時、第 2 王子 Murād はマールワー地方に派遣され [AN: III, 598]、その後グ

宮内部 (buyūtāt⁴²) が配置される。そのあと、【宮内部から】30 ガズをおいて、4方向の所定の隅に人々を集める⁴³。またいずれの側にも、位階に応じてアミーールたちの宿营地 (yūrt) が配置される。土曜日、金曜日、木曜日の衛士 (čawkī-dār) たちは中軍の場所で、日曜日・月曜日については右手で、火曜日・水曜日については左手で、位階に応じて詰めている⁴⁴。

【補足資料】図1、図2

図1は、本訳注において底本との対照に用いている写本Ms. A (おそらく17世紀の書写) の挿図である。Ms. Bにも同様の挿図があるが、記入された事項は図1より少ない。図1に記入された文言にはそれぞれ番号を付して、それぞれの文言の翻字と意味を以下

ジャラート地方、さらにデカン地方へと転進し、同地で没するまで父王Akbarに再びまみえることはなかった。本書を含めたAkbar Nāmahの編纂が始まったのは1591年3月、Akbar Nāmahの一部たる本書の完成は1595年3月から1596年3月のことであるから[真下1999: 54]、仮に本書の叙述が何らかの実例を写し取ったものであるなら、1591年3月から同年9月末までのAkbarの陣営であることになる。その時期、Akbarはカーブル巡幸を終え、1590年3月以来、ラホールに滞在している。但し、ラホール滞在中の1590年10月、母后 Maryam Makānīは帝都ファトゥプルに辞去し[AN: III, 581]、再びラホールのAkbarのもとに戻ったのは翌1591年6月のことであるから[AN: III, 592]、本文のごとく彼女の名がAkbar陣営の記述に現れるためには、その記録は1591年6月以降同年9月末までの間のラホールにおける状況を写し取ったものでなくてはならないことになる。なお図1の内容は本文の記述と異なる。すなわち、中軍から見て右側には本文と同じく「王子 Sulṭān Salīm」が配置されているが(図1 (12))、左側に配置されているのはŠāh Murādではなく「王子 Sulṭān Dāniyāl」であり(図1 (24))、Šāh Murādの名は記載されていない。(M)

42 buyūtātの語の解釈については[AA (Jtr.) (1): 82-83, n. 11]。(M)

43 「人々を集める」ための「4方向の所定の隅」とは、図1中、四方の市場(bāzār)のことを指すか。(M)

44 君主の軍団を7つに分けて、日替わりで君主の護衛(čawkī)にあたらせる制度はhaft čawkīと呼ばれたものであり、1575年に導入された[AN: III, 146] 後、Awrangzīb時代においてもなお運用され続けた[MAI: 240, 251, 285, 338, 375]。戦時における軍団の行動も、同様の7つの単位区分によって行われていた形跡がある[AN: III, 573, 724-725]。ただし本文に説明されている曜日と当直衛士隊との関係は、文献に見える記録と一致しないし(1581年、東国遠征に向かうAkbarの軍団において、中軍付属の衛士は木・金曜日、右翼は土・水曜日、左翼は月・火曜日、前衛は日曜日と定められた[AN: III, 338])、図1の図解も本文とは異なる内容となっている(中軍に配置された衛士は火・水・木曜日(38)、(39)、(40)、右翼は日曜日・金曜日(23)、左翼は月曜日・土曜日(34)とされている)。さしあたり曜日と当直衛士隊の所属先との関係は可変的であったと考えておきたい。(M)

に記した。この挿図が本書の元来の内容であったか否かは判断できないが、本文に述べられていない部署やその空間的配置が説明されているので、参考資料として示す。但し、本文の記述から考えれば、君主の王宮に対して楽士所よりも近い位置にあるはずのアーカース・ディーヤが、むしろ遠方に配置されていることを考えると、この図の信頼性は必ずしも十全とは考えられない。なお図1の中央にある方形の区画は空白であるが、この部分にグラールパールや内廷、外廷などが配置されていたはずである。これらの施設群の配置を、本文の記述から復元した結果が図2である。同様の復元案はすでに Andrews によって示されているが、そこには同意できない部分が多く含まれているので、本訳註に対案を示すものである [Andrews 1999: Folding drawing, no. 1, facing page 884]。

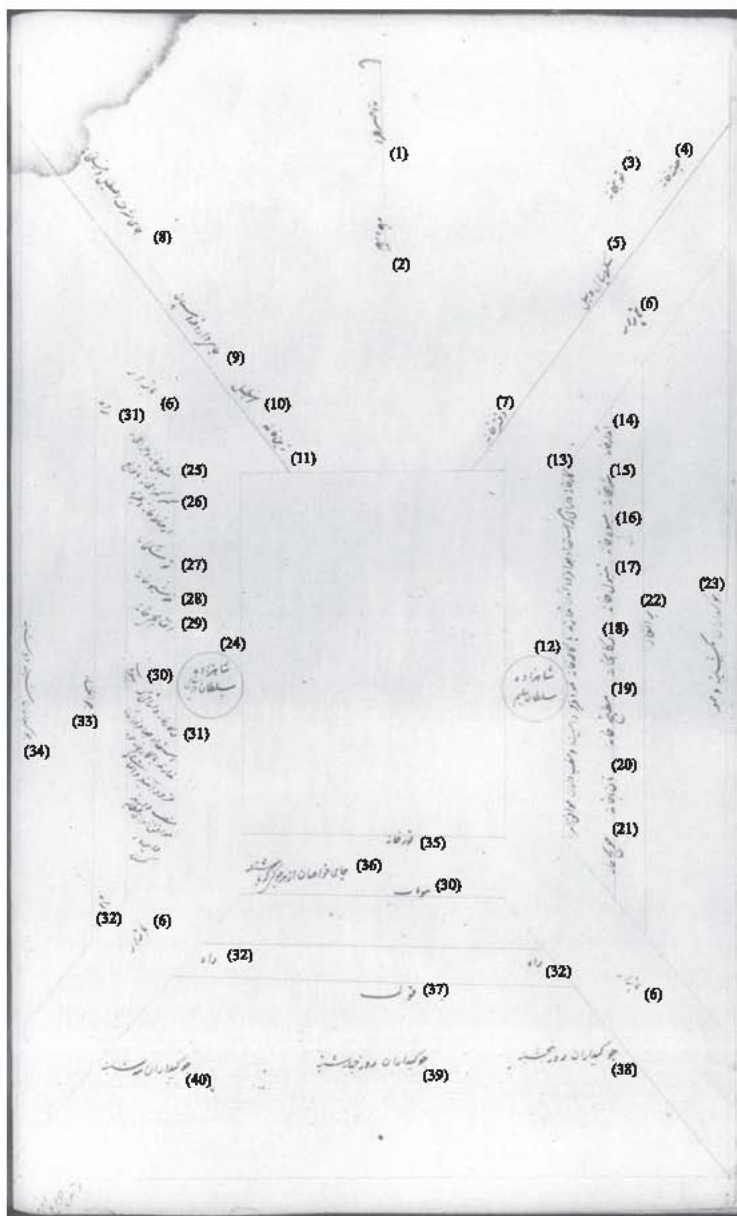
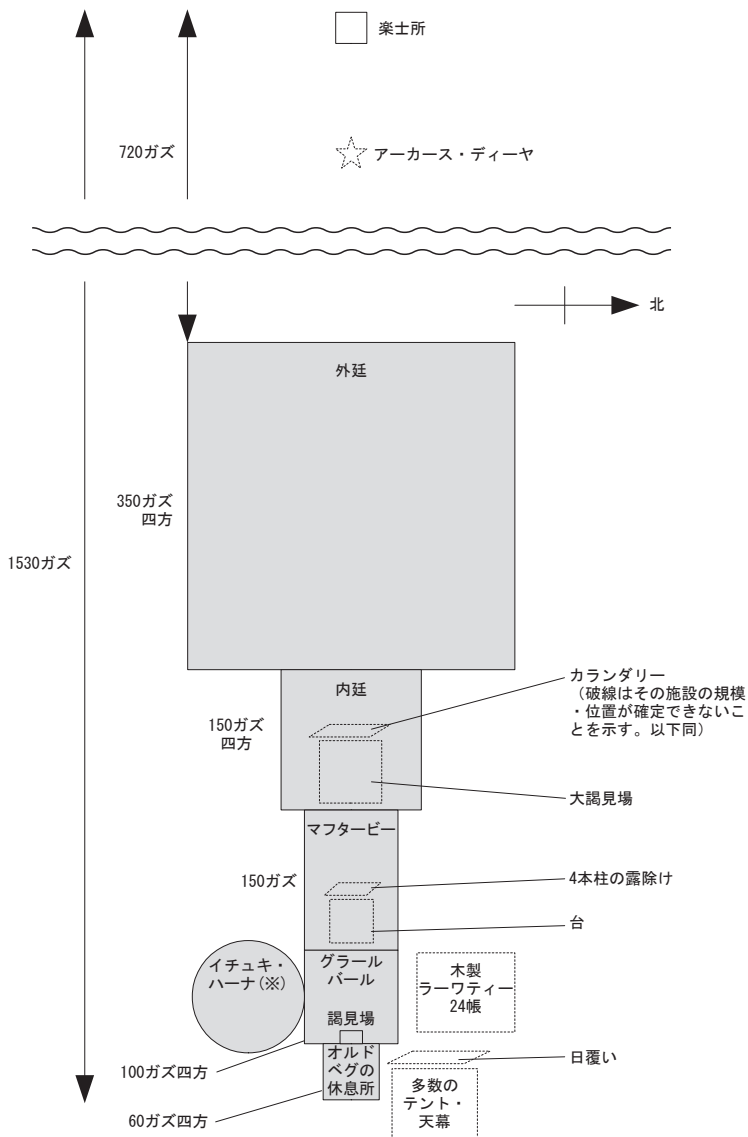


図1 © The British Library Board , Add. 7652, f. 22v

- (1) ākās dīyah (アーカース・ディーヤ)
- (2) naqqār-ḥānah (楽士所)
- (3) tūp-ḥānah (火砲所)
- (4) čītah-ḥānah (チーター所)
- (5) sukh-pāl wa bahal (輿および牛車)
- (6) bāzār (市場)
- (7) daftar-ḥānah (文書所)
- (8) ġā-yi mušrif-i ištābl wa fīl-ḥānah (厩舎・象舎の管理官の場所)
- (9) ġā-yi dārūġah-i asp-ān (馬のダルガの場所)
- (10) ištābl (厩舎)
- (11) zīn-ḥānah (鞍所)
- (12) šāhzādah Sulṭān Salīm (王子 Sulṭān Salīm)
- (13) kār-ḥānah-dār-ān-ī kih isti'dād-i ġudā furūd āmadan na-dārand bā kār-ḥānah-i ḥwud furūd āyand wa maṣṣab-dār-ān muwāfiq-i umarā (分かれて幕営する準備のない宮内作業所の責任者たちは、自分の宮内作業所とともに幕営する。また maṣṣab-dār たちは amīr たちと同様【に幕営する】)
- (14) āb-dār-ḥānah (水役所)
- (15) šarbat-ḥānah (飲料所)
- (16) mīwah-ḥānah (果物所)
- (17) tanbūl-ḥānah (檳榔所)
- (18) rikāb-ḥānah (食器所)
- (19) maṭbaḥ-ḥānah (調理所)
- (20) nānbā-ḥānah (パン職人所)
- (21) ḥawīġ-ḥānah (食材所)
- (22) barāngār (右翼)
- (23) čawkī-dār-ān-i yak-šanbah wa ġum'ah (日曜日および金曜日の衛士たち)
- (24) šāhzādah Sulṭān Dāniyāl (王子 Sulṭān Dāniyāl)
- (25) maš'al-ḥānah wa čirāġ-ḥānah (松明所および灯火所)
- (26) kirik-yarāq-ḥānah bā tawābi' az ḥayyāt-ḥānah wa ġayrah (御召物所。仕立師所その他に所属するものも含む)
- (27) tūšak-ḥānah (敷物所)
- (28) ḥūš-bū-ḥānah (芳香所)
- (29) āftābačī-ḥānah (水差役所)
- (30) buyūtāt (宮内部)
- (31) wa kār-ḥānah-dār-ān-ī kih isti'dād-i ġudā furūd āmadan na-dārand bā kār-ḥānah-i ḥwud furūd āyand wa ān-hā-ī kih maṣṣab-dār-and muwāfiq-i umarā-yi 'izām dāyrah kunand (および分かれて幕営する準備のない宮内作業所の責任者たちは、自分の宮内作業所とともに幕営する。また maṣṣab-dār である者たちは有力アミールたちと同様にテントを営む)
- (32) rāh (通路)
- (33) ġawāngār (左翼)
- (34) čawkī-dār-ān-i šanbah wa dū-šanbah (土曜日および月曜日の衛士たち)
- (35) qūr-ḥānah (武具所)
- (36) ġā-yi ḥwāṣṣ-ān az har čawkī kih bāšand (各曜日の護衛に属する貴顕たちの場所)
- (37) qūl (中軍)
- (38) čawkī-dār-ān-i rūz-i paṅġ-šanbah (木曜日の衛士たち)
- (39) čawkī-dār-ān-i rūz-i čahār-šanbah (水曜日の衛士たち)
- (40) čawkī-dār-ān-i rūz-i sih-šanbah (火曜日の衛士たち)



(※) グラールパールの北側に外接していた可能性もある。

図2 本書の記述から導かれた諸施設の配置

灯火を燈す際の規則⁴⁵

賢明なる心を備え、世界を輝かせる御方は、光への愛好を神への崇拜とみなし、神への賞賛と考える。【一方】暗愚な精神を備えた無知な者は、正義を行う御方を忘れ、火を崇拜することであると考え。洞察力のある知性の探求者はよく知っている。つねに、選ばれた人々の行う、形あるものへの賛美は然るべき方法を備えていなくてはならぬと。【人々はそれを】しないことを非難すべきものとみなすのである。【それゆえ】人間の存在と生存の源泉である、かくも高貴なる元素を尊ぶことが、いかに相応しからぬものであり得ようか。また、どうしてそのような【火そのものを崇拜するという】墮落した考えに陥ることがあろうか。シャラフ・アッディーン・マネーリー (Šayḥ Šaraf al-Dīn Manērī⁴⁶) は

45 Andrews は、ペルシア語原文にもとづいて、本節の一部の新たな英語訳を提示している [Andrews 1999: II, 1281]。 (M)

46 Šayḥ Šaraf al-Dīn Aḥmad b. Yahyā Manērī (d. 782/1381) は、現ビハール州のマネールの生まれで、今日もなおビハールで最も崇敬されるスーフィーとされる。彼の父 Yahyā も当時の有名なスーフィーであった。Šaraf al-Dīn Aḥmad は、Abū Tawwāmah al-Ḥanbalī にしたがって故郷からソーナールガーオンに移り、イスラーム諸学全般について学んだ。その後、単身デリーに移住し、当代の様々な著名なスーフィーたちとの交流を得たがそのいずれの門下にも属さず、最終的にはほとんど無名であった Nağīb al-Dīn Firdawsī の弟子となった。師 Nağīb al-Dīn が死去 (1332) した後、帰郷の旅路にいった Šaraf al-Dīn であったが、結局マネールへは戻らず旅の途中で Bihiyā の森に入り、さらにそこからラージギル丘陵へ向かった。ラージギルで彼はその地に住んでいたヒンドゥー教の僧侶たちと交わり、その後請われてラージギルからビハール・シャリーフに移った。デリーの Sulṭān Muḥammad b. Tuḡluq (1325-1351) は Šaraf al-Dīn に土地を寄贈し、彼は 1381 年に死去するまでその地に住んだ [Jackson 1980: 1-2; Khan & Ram: 3-42]。 (W) なお、Šaraf al-Dīn の生年について、従来一般的であった 1263 年説では、彼が 117 歳という破格の長寿になってしまうという問題点があった。この点に関して最も網羅的に材料を集めて検討した Jackson は、Šaraf al-Dīn が Sulṭān Maḥmūd の治世に生まれたとの伝承について、デリー・サルタナトの Sulṭān Maḥmūd (r. 1246-66) ではなくベンガルのラクナウティーを支配した別の Sulṭān Maḥmūd (r. 1287-1291) と判断できるとして、Šaraf al-Dīn の生年を 1290 年頃と推定している。この説だと Šaraf al-Dīn は 91 歳ほどで没したことになり、不可能な数字ではない [Jackson 1987: 34-36]。本文中で以下に続く部分は、彼の代表的著作である *Maktūbāt-i Šadī* の第 19 書簡において、直接の対話が叶わない預言者や先人の著作を読み、彼らの思想や修行法を学ぶことを、太陽が沈んだ後に灯火を用いることに喩えていることを踏まえたものと考えられる [MKŠ: 123-124; MKŠ (Etr.) 79-80]。 *Maktūbāt-i Šadī* はムガル帝国時代にも広く読まれていたと見られ、Abū al-Faḍl の同時代人 'Abd al-Qādir Badā'unī の著作にも引用されている [Ninomiya

いかに巧みに述べていることか。誰にとっても太陽は沈むものである。もしも灯火でどうにかやれないならどうすればよいのか。炎はかの神の光の源から発するものであり、かの神聖なる本質のしるしである。もしも太陽と火がなかったら、食べ物や薬はどこから得られようか。見る力があっても何の役に立とうか。この幸運なる蠟燭の火は天のものである。<I, 44>

その輝きで世界を燃え立たせる正午の太陽が高みにあるとき、輝く白い重い玉——ヒンドの言葉ではスーラジュ・クラント (sūraḡ-krānt⁴⁷) と言われる (スィーンのダンマ、ワーウのスクーン、ラーのファトゥハ、ジームのスクーン、カーフとラーとアリフ、無音のヌーン、上双点つきのター) ものだが——を太陽にかざし、少量の綿を近づける。熱によって綿に火がつく。天からもたらされたその火は仕事に通じた者たちに委ねられる。灯火係たちと松明係たちと料理人たちはその火で自分の仕事を遂行する。吉祥のうちに1年が終わると、新たにまた採火される。【その火を】その中に燈しおいておく容器はアギングル (agingr⁴⁸) という (ハムザのファトゥハ、ペルシア語のカーフのカスラ、ヌーンのスクーン、ペルシア語のカーフ、ラーのスクーン)。つまり火入れのことである。

また、輝く白色の石が知られているが、それはチャンドウル・クラント (čandr-krānt⁴⁹) と呼ばれる (ペルシア語のジームのファトゥハ、ヌーンのスクーン、ダール、ラー)。それを月に向けてかざすと、水がにじみ出る。

2006: 346]。 (N)

47 ヒンディー語で krānt (= kānt) は好むもの、愛するもの (lover) を意味する。sūraḡ-kānt は太陽を好むもの (sun lover)。なお krānti は天体の「食」も意味する。 (W)

48 サンスクリット語の agni-grh (火の住まい) であろうか。 (W)

49 注47参照。čandra-kānt は月を好むもの (moon lover)。月長石 (moon-stone) を指す。なお、Bīrūnī は、Hind の人々が ḡandar kānd すなわち「月の光 (šū'ā' al-qamar)」と呼ぶ「月の石 (ḡaḡar al-qamar)」という石がある、と述べている。さらに、「Hind の人は、[この石を] sumrat の中に置くとそれ [その石] から水が滴ると主張する」という (sumrat は、英訳本の注によるとコロシントのこと)。Bīrūnī はこれを水晶 (ballūr) のことと考えており、「水晶は「口」に含むと冷たい」という属性 (lawāzim) があることから、ちょうど水を入れた金属の容器の表面に水滴がつくのと同様の理由で水滴を生ずるのだらうと推察している [JJ: 153-154; JJ (tr): 66]。 (W)

日没まで1ガリー (gharī⁵⁰) になると、世界の王は、もし騎乗しておられれば下馬なさる。もし眠っておられたらお目覚めになったうえで、世界を飾る美しい帳のいずれからも離れて、【自らの】外面を内面と同じように【輝かしく】なさる。世界に輝きを与えるもの【太陽】が己の光を覆い隠すと、幸運に向かう奉仕者たちは12枚の金や銀の大皿に樟腦入りの蠟燭⁵¹を燈し、【皇帝陛下の】御前に持ってくる。雄弁な舌の歌い手たちのうちの一人が蠟燭を手には神への感謝を捧げ、様々な方法で歌う。それから日々増す国運のための祈りを詠み上げ、読誦の終わりをそれで締めくくる。世界の王は賛美と嘆願をより高い段階に位置づけ、新たな輝き【夜明け】を乞う。

燭台や灯明の出来栄は称賛を超えており、匠たちのわざを記すには筆の力が及ばない。10マン以上【の重さ】に造られるものさえあり、一枝や二枝、その他の様々な姿で飾られる⁵²。【それらは】明敏な者たちの輝きを増すものとなる。

50 60 gharīが1昼夜に等しい(すなわち1 gharīは24分に相当する)ことは、本書を含め、ムガル帝国時代の諸史料に説明が見える[BN: 464; BN (Jtr.): 464; AA: I, 272; AA: II, 9; DAA: 3r]。史料に頻出する時間の単位としてはgharīの他にpahrがあり、これが昼と夜をそれぞれ4等分したものであることについても、本書を含め諸史料に記述がある[BN: 464; BN (Jtr.): 464; AA: I, 272; AA: II, 9;]。但し1 pahrが1日の8等分でないことには注意が必要であり、本書が、1 pahrについて「均一ではない」[AA: I, 272]、「ほとんどの土地で9 gharīより短く、6 gharīより長い」[AA: II, 9]と説明しているのは、季節・緯度・高度の違いにより、昼のpahrと夜のpahrとで長さに差異があることを言ったものである。それゆえpahrが1日の8分の1である3時間に相当するという辞典類の説明は正確でないし、1 pahrが8 gharīに相当するという等式も無意味である(例えば[Platts 1884: 285])。本訳注の訳注者はpahrについて「1パフルは3時間に相当し、8ガリー (gharī) に等しい」と注釈したが[AA (Jtr.) (2): 77, n. 7]、如上のことから、同注釈を全面的に撤回する。(M)

51 kāfurī šam', Blochmannはこれをwhite candleと訳すが[AA (Etr.): I, 51]、本訳注はDihḥudā等の辞典の語釈(šam'-i kāfurīの用例)に従った[Dihḥudā: šam']。Šāh Ḡahān時代初頭に成立したと考えられる、君主の家政全般に関する著者不明の著作Bayād-i Ḥwus-bū'īには、各種の蠟燭の製法に関する章が設けられており、そこには「赤色の蠟燭」「黄色の蠟燭」等への言及が見られるが、「白色の蠟燭」や「樟腦入りの蠟燭」は在証できない[BKh: 103v-107v]。(M)

52 16世紀に描かれたḤamzah Nāmahの挿絵や、Šāh Jahān時代の歴史書Pādšāh-nāmah中の皇子Dārā Šukūhの婚礼の場面の挿絵には、様々な形状の燭台類が描かれている[Seyller 2002: plates 24, 42, 47; Beach & Koch 1997: plates 25-26, 27-28]。ムガル帝国時代の燭台の実物については[Welch 1985: 206]を参照されたい。(N)

神聖なる発明品に、1 イラーヒー・ガズ⁵³の高さの灯明がある。その上にはさらに五つ【の灯明】が置かれ、それぞれの上に動物の像がある。3 ガズ以上の高さに樟腦入りの蠟燭が幾つか据えられ、花飾りが付けられる。

室内外の明るさを増すためには、松明も灯される。【月の】明るさが乏しい朔望月の1日目、2日目、3日目には、八つの燈火が灯される。4日目から10日目までは一つずつ減り、【月の】明るさが増す10日目には一つで十分になり、15日目までそのままである。<I, 45> 16日目から19日目までは一つずつ増やされる。20日目は19日目と同じである。21日目と22日目には一つずつ増やされる。23日目は22日目と同じであり、24日目から月の末日までは八つずつである。それぞれの燈火には1 スィールの油と半スィールの綿を用いる。場所によっては油脂灯が用いられ、油の代わりに獣脂が燃やされる。燈火の大小に応じて、【油量は】加減される。

世界の主人たる御方はまた、宮廷を目指すものたちの道しるべのために一つの燈火を据えた。謁見場の前に40ガズ以上の【高さの】柱を立て、16本の綱で固定する。その上に、巨大な灯明を点ける。それは、アーカース・ディーヤ（ハムザとアリフ、カーフとアリフ、スィーン、ダールのカスラ、下双点付きのヤーのファトゥハ、書かれただけのハー⁵⁴）と呼ばれ、遠くからでも明るく見える。宮廷に向かう者たちはそれによって歩みを進め、自分の位置を知る。以前は、人々は行軍の際に戸惑い、目的地にたどり着けなかったものであった。

この宮内作業所では、多くのマンサブダール、アハディーやその他の兵士が奉仕している。歩兵の手当は2400 ダームから80 ダームまでである。

53 ilāhī gazについては [AA (Jtr.) (1): 113, n. 72]。 (N)

54 本文の発音解説によるならば ākās-diyah と綴るべきだが、Platts に従い ākās-dīyah として読んだ [Platts 1884: 64]。 (M)

王権の権威の規則⁵⁵

威令を布達する御方の天蓋 (čār-tāq) の太陽飾り (šamsah) は、神の光彩 (farrah-i īzādī) である。その光彩は、【人間の側から】なし得る努力という仲立ちなしに、神の御力によって届けられたものである。文知を増進せしめる王座の主たちは、外貌の装飾にも気を遣うものであり、これを神の光芒の反映であるとするものである。その一部について記し、自らの時代の規則としておこう。

王座 (awrang) は様々なかたちに仕立てられる。宝石がちりばめられていたり、金や銀やその他でできていたりしており、その表面は光り輝いている。

日除け (čatr⁵⁶) は高価な宝石で装飾されている。必ず七つ以上ある。

日覆い (sāyah-bān) は、円いかたちをしており、高さは1ガズある。またその取っ手は日除けと同様、錦やそれに類するものによって上張りが施されており、最上の宝玉で飾られている。手際の鮮やかな侍者がととのえ、太陽の輝きの中に差し掲げる。これはアフターブギール (āftāb-gīr) とも呼ばれている。

カウカバ (kawkabah⁵⁷) は、会合の場の上座 (pišgāh) にいくつか差し掛けら

55 Andrews は、ペルシア語原文にもとづいて、本節の一部の新たな英語訳を提示している [Andrews 1999: II, 1281-1282]。 (M)

56 古代インドや古代イラン以来、日除け (傘) は王の権威の象徴として用いられてきた [Gonda 1956: 122-123; Sims (Elr)]。ムガル帝国に直接先行するティムール朝やデリー・サルタナトにおいても、日除けの使用が認められる。ティムール朝においては、Timūr が暗い赤地に金の飾りがついた傘を使用している絵画の事例が残されている。デリー・サルタナトにおいては日除けの事例はより頻繁に見られ、色も豊富である。また、王自身が用いる以外に、王が王族を地方に任じる際に傘 (šatr/čatr) を下賜する事例も見られる。傘の色や使用できる本数は使用者の位階によって定められていたと考えられている [Andrews (El2)]。Ibn Battūṭah は、トゥグルク朝の Sulṭān Muḥammad は移動中も宮殿においても傘を用い、スルターンの陣はシャトル (傘) と呼ばれていたことを伝える。また、イードの際には、スルターンのために16頭の象と宝石をちりばめた16本の傘が用意されたという [IB: 205-206, 228, 233, 237; IB (Jtr.): V, 17-18, 60, 64, 66]。 (N)

57 Farhang-i Ġāhāngīrī (1608/9年成立) は、kawkabah が čawgān と同じであること、細長い木材で、先端が湾曲しており、そこに鋼鉄製の球を吊り下げていること、これが čatr と同様、王権の用具 (lawāzim) の一つであることを、を伝えている [FJ: II, 1967b]。ムガル帝国時代の図像資料にはこの種の旗・記章が描き込まれている例が多数あるが、上記の如き形状のものは管見の限り、Akbar 時代に製作された Bābur Nāmāh 写本の挿絵にそれとおぼしきものが見られる一例に過ぎない [Сулаймон 1970: plate 47]。石版本テ

れる。

以上の四つは、時代の主たる御方以外の者に対しては、権威を増さしめるべく用いられることはない。

旗幟 (‘alam) は騎行の際に武具 (qūr⁵⁸) とともに用いられる。かならず五つ以上ある。いつもは緋色の鞆の中に入っていて、宴会や戦闘の際に広げられる。

<I, 46>

チャトゥル・トゥグ (çatr tūq) は旗幟の一種である。旗幟よりも短く、いくつかの房飾り (qutās) が取り付けられている⁵⁹。

テュメン・トゥグ (tuman tūq) はチャトゥル・トゥグに似ているが、それよりは長い⁶⁰。

クストにはkawkabah等の記章の図があり、これが英訳書にも採録されているが、その出所は不明であり、信頼するに値しない [AA L: facing 157]。なおCareriはAwrangzībの軍営で「鍍金された二つの手【の飾り】の間に鎖でぶら下げられた金色の球」を目撃し、これが「王の記章」として「行軍中は象によって運ばれる」ことを伝えているが [Careri: III, 154; Careri (Etr.): 219]、これがkawkabahにあたるかどうかは判然としないうし、Irvineも断定はしていない [Irvine 1903: 32]。(M)

58 qūrは箠を意味するが、ムガル帝国時代の史料では、武具全般へと意味が拡大した。本書には「武具所 qūr-ḥānahの規則」と題される節があり、そこでは君主御用の刀剣、弓矢、槍、棍棒、戦斧等が言及されている [AA: I, 118-124]。ただしその箇所においても、本書の記述はqūrが謁見の際に掲げられるという、儀礼上の機能に及んでいる [AA: I, 118-119]。君主の護衛 (kişik) の当番は午後には宮廷に参上することになっていたようだが、その際、衛士たちは「御用のqūrの両側」で階級ごとに整列した後、「qūrの挨拶 (taslīm-i qūr)」を命じられたという [BNL: I, 152; AIN: 746-748, 1105]。史料にはqūr-bīgīという役職が散見されるが、その任務はこのような君主御用の武具全般を管理することであったと考えられる。(M)

59 tūq / tūg は Doerfer によるとヤクの尾あるいは馬の尾の旗。語源は中国語の「纛」に遡るという [Doefer 1963-1975: I, 618-622]。またqutāsとの関連ではtūqは「三角旗の上にある竿の上に取りつけられたqutāsすなわち山の牛の尾でできた旗」であるという [Pavet de Courteille 1870: 236]。(M)

60 tuman tūq / tūgは「万人隊旗、万人隊長の所持する纛、万人隊長の旗差しものを意味する」[間野 2001: 251, n.7]という。Tārīḥ-i Rašīdīには、Tuğluq-tīmūr Ḥānの子Ḥiḍr Ḥwāḡah Ḥān時代(在位1389年より以前～1399/1400年頃)におけるドゥグラート一族の当主Amīr Ḥudāyādāhについての記事があり、この人物の「祖先のひとり」に対してČingiz Ḥānから与えられた7つの特権 (mansab) についての説明がある。そのうち「第一は太鼓 (tabl)」。第二は旗幟 (‘alam) である」といい、「テュルク語では、【後者を】tūmān tūg、【前者を】naqqārahという」と伝える [TR: 82] (Tārīḥ-i Rašīdīの一連の記事の校訂テキストと日本語訳注は [間野 2001: 240-256])。

なおtuman tūq / tūgの語の用例はムガル帝国時代の史料にも散見される。本文の説明

旗幟の中でも以上の二つは、他よりも高く位置づけられる⁶¹。後者は、地位の高い貴人 (nū'in) たちのためにのみ用いられる。

ジャンダー (ġhandah) (ジームのファトゥハ、隠れたハー、隠れたヌーン、ヒンド語のダールのファトゥハ、書かれただけのハー) はインド風の旗幟である。

以上のいずれも武具とともに用いられねばならない。重要な機会には数多く仕立てられる。

さて楽士所⁶²で用いられるものについて。

キョルゲ (kūrgah) は、よく知られた言葉ではダマーマ (damāmah) と呼ばれている⁶³。だいたい18組で高らかに演奏される。

ティンパニ (naqqārah) はおおよそ20組で演奏される。

ドラム (duhul) は4台が演奏される。

金管楽器 (karnā) は金、銀、真鍮あるいは他のもので作られており、少なく

するとおり、たしかにその受領者は王子かさもなくば最高位の貴族である。以下に主な用例を挙げる：HumāyūnがMun'im Hānに毛皮の衣 (ġamah-i dāġū)、象、hānの称号、tuman tūġ (原文 tuman wa tūġ を読み替えた)、太鼓を恵与 [THA: 196]; Akbar が 'Abd al-Raḥīm に hān-i hān-ān の称号、馬、ヒルア、宝石をちりばめた短剣の腰帯、tuman tūġ と 5000 maṣṣab を恵与 [MT: II, 336]; Akbar が3人の王子たち (Salīm, Murād, Dāniyāl) にそれぞれ maṣṣab 12000, 9000, 7000 を授与し、さらに天幕係所 (farrāš hānah) と「王権の諸物」、tuman tūġ、太鼓を恵与 [MT: II, 342]; Ġahāngīr が王子 Ḥurram に tūmān-tūġ、旗幟、太鼓を恵与し、8000 dāt 5000 sawār の maṣṣab によって引き立て、ġāgīr を与えた。[JN: (T): 51 / JN (A): 42]; Ġahāngīr が王子 Sulṭān Ḥusraw を 10000 maṣṣab に列し、太鼓と tūmān tūġ が恵与された [INJ: 510]; Awrangzīb が Hān-i Hān-ān に1千万 dām の評価税額 (ġam) のある地区を与え、「この王朝では高位の貴人 (nū'in) たち、将軍 (sipah-dār) たちにしか下されない荣誉である tūmān tūġ」を恵与した [AIN: 741]; Awrangzīb が王子 Muḥammad Akbar に 8000 dāt 2000 sawār の maṣṣab と tūmān tūġ、太鼓、日覆い (āftāb-ġīr) を恵与した。[AIN: 1047] (M)

61 この一節 'DR PAYH BRTR NHND' は「位階が高いものと見なされる」ないし「高い台座に据えられる」のいずれとも解せる。ここでは前者の解釈で訳出した。(M)

62 naqqār hānah については [Lambton (EI2)], [Farmer (EI2)], [Feldman (EI2)] によって簡単な説明を得られる。ムガル帝国における naqqār hānah についての欧人の記録としては、下記注64所引の Bernier の記事のほか、Āgrah 城内の naqqār hānah を 'Naubutt Conna' (nawbat hānah) として記録した Mundy のものがある [Mundy: II, 209-210]。(M)

63 kūrgah もケトル・ドラムの一種である [Doerfer 1963-1975: I, 473]。(M)

とも4本以上で演奏される⁶⁴。

リード楽器 (surnā) にはアジャム式のものヒンド式のものがある。9本で演奏される⁶⁵。

ラッパ (nafir) にはアジャム式、ファラング式、ヒンド式のものがあり、それぞれ数本で演奏される⁶⁶。

角笛 (sing) (スィーンのカスラ、隠れたヌーン、ペルシア語のカーフ) は銅製で、牛の角のようなかたちで作られている。【演奏の際には】2本が用いられる⁶⁷。

64 karnāについてはBernierの記録が参考になる：「[中庭の] 四角の一片の中央にある大きな門の上には大きな基壇 (Divan) があり、ナガーラ・カーナ (Nagar-Kanay) と呼ばれ、中庭に面した側は開けっ放しになっています。何故なら、ここは昼と夜の決まった時間に合奏されるトランベッターというよりむしろオーボエーとティンパニーが置かれている場所だからです。とは言うものの、これは、新参者でまだ慣れていないヨーロッパ人の耳には、非常に奇妙に聞こえるコンサートです。何故なら時には十から十二のこれらオーボエと同数のティンパニーが同時に鳴りますし、カルナー (Karna) と呼ばれる一尋 (brasse) 半の長さの、下部に一尺 (pied) は下らない開口部を持つようなオーボエがあり、同様にティンパニーは銅か鉄製で、直径一尋は下らないからです。」[1 brasse = 約 1.6 m. 1 pied = 32.4 cm] [Bernier: 254; Bernier (Jtr.): 217-218]。また図像資料としては、例えばDārā Šukūhの婚儀の際のパレードを描いた写本挿絵に楽隊の姿が見え、karnāとおぼしき大きなベルを備えた長い金管楽器を観察できる[Wade 1998: 172-174, pl. 18]。ただしkarnāには「白鳥の頸の形をした」ものもあったようである[Wade 1998: 174, fig. 145]。(M)

65 surnāについては[Wade 1998: 137-142]が詳しい。図像資料は[Wade 1998: figs. 47, 92, 99, 101, pl. 13]。いくつかの図像では、奏者がリード部分をくわえているというより、金管楽器のマウスピースに唇を当てているように見えるが、これはマウスピースではなく 'lip disk' である。現代の「ズルナ」の写真が[柘植 1992: 44, 52]にある。(M)

66 Wadeは、nafirについて「謎の楽器である」とであるとしたうえで「おそらくは円錐型の楽器」であろうとする。[Grieg 1987]は「nafirは、細い円筒形の内径を備えており、円く膨らんだメタル・リングで接続された複数の管から成っている」と説明しているらしい([Wade 1998: 173] 所引)が、根拠は不明である。(M)

67 これはインド在来の楽器であるらしい[Wade 1998: 121-124]。14世紀後半のグジャラート地方においてペルシア語で書かれた *Gunyat al-Munyat* には *sīngā* という楽器が挿絵付きで説明されている：「角 (šāh) でできている。1 dastの長さであり、口の方の4 anguštが開いている。dīnār にならって【?】、象牙でできている。内部は空洞になっている。その中間は銅で輪飾り (nūl) が施されている。持ち運びされる。次の図の通り。【図省略】」[GM: 61]。またムガル帝国時代の図像資料には「C字型の」ホルンが見える[Wade 1998: figs. 75, 76, pl. 17]。なお Ms. A は欄外にテキストを補って ran sing とする (これは ran-sīngā (Battle-conch, war-trumpet, trumpet [Platts 1884: 599] にあたる) [AA Ms. A: 23v]。(M)

シンバル (sinğ) は3組で演奏される⁶⁸。

かつては、日暮れまで4ガリーになったときと、夜明けまで同じく【4ガリーになったときには演奏が行われていたものである。今は最初【の演奏】が、世界の光を増すもの【太陽】が上昇に転じる夜半に、次【の演奏】がその世界を輝かすものが現れる【夜明けの】ときに【行われる】。それよりも1ガリー前に、夜明けをもたらず⁶⁹魔法の息を持つ者たちがリード楽器の演奏で【夜明けを】知らせる調べ (zamzamah) を奏で、眠っている人々を起こす。1ガリー後には調音 (čāšnī) が行われる。キョルゲが少し鳴らされてから、金管楽器とラッパと、権威を示すその他の楽器 (asbāb) がティンパニを除いて【すべて】鳴らされる。少ししてから再びリード楽器が奏でられ、歓喜をもたらずラッパによりリズム型 (uṣūl) が保たれる。さらに1ガリーが過ぎると、ティンパニの演奏が行われる。演奏の名人たち全員が幸運なる名声⁷⁰を高らかに奏でる⁷¹。

七つのものが悦楽を増さしめる。最初はムルサル (mursal⁷²) である。これは

68 以上の記述が「王権の権威」のタイトルの下、旗と楽器を一箇条に取り扱うのは、ムガル帝国の君主から恵与される品物として旗幟 ('alam) と太鼓 (naqqārah) がほぼ定型化していた事情によるのであろう。この二つの品物がセットで恵与される例としては、前記の注60に引いた記事の他、以下のようなものを挙げることができる：(Akbar時代) Pīr Muḥammad Ḥān が Akbar に伺候し、ḥān のラッパ、'alam と naqqārah を下された [TAK: 56]。；(Akbar時代) Rāgha Bhagwān-dās に 'alam と naqqārah が与えられた [TA: II, 244]。；(Ġahāngīr時代) Pīr Ḥān b. Dawlat Ḥān Lūdī に Ṣalābat Ḥān の称号を与え、maṣab を 3000 dāt 1500 sawār とし、'alam と naqqārah を恵与した [JN: (T) 51/ (A) 42]。；(Ġahāngīr時代) Dakan の ṣūbah で任務にあたっていた Šīr Ḥwāghah, Mīrzā 'Alī Akbar Šāhī が 'alam と naqqārah を与えられた [INJ: 474]。(M)

69 直近にある jadū (魔法) の語と関連し、sihr (魔法) と saḥar (夜明け) をかけた掛詞であろう。(W)

70 ṣīt-i iqbāl. Blochmannはこの語句を、曲の一種を指す名称と解して“the auspicious strain”と引用符付きで訳し、「おそらく君主に対する祝祷であろう」と注釈しているが、それが具体的にどのような曲を指すのかは不明である [AA (Etr): I, 53]。(W)

71 行軍中における楽士所の演奏については、夜9時に行われるラッパの吹奏は翌朝の進軍が無いという信号であったことを Manucci が伝えている [Manucci: II, 67]。(M)

72 以下で述べられている「七つのもの」が具体的に何を指すのかは不明である。ただし、mursal に関しては、JN にも記述があり、そこからティンパニの演奏に関わる用語として用いられていたことが分かる。JN には、皇子 Šāh Jahān から Jahāngīr への新年の贈物の中に、金で作られた「mursal 演奏の [ための] 2個一組のティンパニ (naqqārah)」があったという記述がある。これらは、Jahāngīr が玉座に着く際に、銀でできたその他の楽器とともに演奏されたという [JN (T): 300 / JN (A): 265]。なお、mursal を Rogers

ムルサリー (mursalī) で始まる。それは特定のリズム型である。<I, 47> それからバルダーシュト (bardāšt⁷³) が演奏される。それもいくつかのリズム型である。このときにはすべての演奏家たちが演奏に加わる。その後に音域を上げる⁷⁴。そして高音から低音に向かう。二番目は四つのリズム型の演奏である。すなわちイフラーティー (ihlāṭī)、イブティダーイー (ibtidā'ī)、シーラーズイー (šīrāzī)、カランダリーイ・ナカル・カトゥラ (qalandarī-yi nakar qaṭrah) である。最後のものについては【カランダリーイ・】ナフード・カトゥラ (naḥūd qaṭrah) ともいう。このようにして1ガリーの間演奏される。三番目は古今のホラズム様式 (Ḥwārazmī-hā) の演奏である。世界の王が200以上を創られ、老いも若きもそれを楽しむ。特に、「大王の栄光 (ḡalāl-i šāhī)」と「MHAMYRKRK⁷⁵」と「ナウルズイー (nawrūzī)」【が好まれる】。四番目はシャーディヤーナ (šādiyānah) の演奏である。五番目はビ・ミヤーン・ダウル (bi-miyān dawr) の演奏である。六番目はタワグジュフ (tawaḡḡuh⁷⁶) である。これは、ラーヒ・バーラー (rāh-i

は 'the mursal (overture ?)', Thackston は 'the opening fanfare' とそれぞれ訳している [JN (Etr.) (Rogers): II, 79 / JN (Etr.) (Thackston): 297]。 (W)

73 詳細は不明である。ただし、これも何らかの音楽用語であったようであり、During の説明では、アゼルバイジャンの Humāyūn 旋法を構成する10ほどの gūšah (あるいは šu'bah) のひとつに bardāšt が数えられている [During (Elr) Homāyūn]。gūšah (原義は「角 (かど、すみ)」) とは、「比較的小単位の旋律」で、「規模的には小旋律型から小曲に近いものまで様々である」という [谷2007: 27]。また šu'bah (アラビア語で「枝」) は、おそらく同様に小さな旋律型に相当するものを表すと思われるが、サファヴィー朝時代には、「旋法 (modal system)」は6つの āwāz、12の maqām、24の šu'bah、そして48の gūšah によって構成されていたとされ、šu'bah と gūšah は区別されていたことがうかがえる [During (Elr) Guša]。 (W)

74 底本には zīr namāyand とある。音楽の用語としての zīr には「楽器の弦のうちバスの反対の細い弦」の意があり [Dihḡudā: zīr]、これが転じて「高音」を指すことから、底本の表現を本訳注では「音域を上げる」とした。Blochmann は「最弱音 pianissimo」で奏することと解し、被注箇所以後続する文も音量の大小を説明するものと見なしているが、従えない [AA (Etr.): I, 53]。 (W)

75 不明。Blochmann は 'Mahāmīr karkat' と読んでいるが、訳を与えていない [AA (Etr.): I, 53]。 (M)

76 tawaḡḡuh (アラビア語 waḡh のV形 (to turn) の動名詞) はおそらく最高音域を担っており、ここから低音域に向かって「転換 (tawaḡḡuh)」していくことを意味していると考えられる。谷によると、イラン音楽に見られる「ひとつの旋法を構成する、幾つもの伝統的な旋律型というものは、おおまかに言えば低音域を担う旋律型から高音域を担う旋律型へ、という時間的流れに沿って演奏されて」いき、最高音域の旋法に達

bālā) と名付けられているアウファル (awfar⁷⁷) のリズム型による。その後で音域を上げる。七番目はホラズム様式のムルサルを演奏し、ムルサリーに戻る。それから【低音に】下がってきて⁷⁸ (furū guḏāšt)、永久の王朝のための祈りで終わりを迎える。そして再び全員が音域を上げて演奏する。心を楽しませる文句と魂を沸き立たせる詩句が読み上げられて、締めくくられる。この部分もまた1ガリーにわたって心の喜びを増さしめる。その後でリード楽器弾きたちが夜明けを完全なものにし、さらに1ガリーをこの喜びで満たす。そして心を惹きつけるやり方で終わる。

世界の王は音楽の知識については、この技芸の大家たちにもないほどに備えており、これと同様、容易に見えるこの難しい技 (muškil) の実践の方も相当の腕前 (piš dastī) を持っている。特にティンパニ演奏については【上手である】。

この宮内作業所にはマンサブダールたちとアハディーたちとその他の部隊が勤務している。歩兵たち (piyādah-gān) の月給は340ダーム以下、74ダーム以上である。

した後、「今度は急速にフルード forūd と呼ばれるある一定の旋律型を経ながらもとの音域・雰囲気へと戻ってゆく」とされる [谷 2007: 120-121] (旋律型 gūšah については注 73 を参照)。(W)

77 底本では aḏfar とあるが、Ms. A, Ms. B いずれにおいても awfar と記されている。ここでは後者を採用し、リズム型の名称として考える。During によると、17世紀のものとと思われる著者不明の音楽書 *Ma'rīfat-i 'Ilm-i Mūsīqī* には、当時使われていた「リズム周期」(dawr)の表があり、熟練の演奏者はそのうち五つの基本パターン ('uṣūl) (リズム型。具体的には、mutarraḡ, awfar, ḡahārgāh, ḡarb, muḡammas) を習得しているものとされたという [During (EIr) Dawr]。(W)

78 底本には furū とあるが、「下へ」を意味する語フルード forūd に同じと解した。注 76 に述べたようなイラン音楽の構造のもとでは、フルードは「直接的にはそれまで徐々に上昇してきた音域を下げる」とともに、様々に変化してきた音楽の雰囲気をもとの状態へと戻す役割を担っている」という [谷 2007: 120-121]。During によれば、フルードは、基本的に導入の旋律型であるダルアーマド (darāmad) よりも高音域にはならないものではあるが、「旋律の高低 (melodic movement) におけるこの側面はフルードの final motif という概念ほどには考慮されない」という [During (EIr) Forūd]。(W)

帝王の印璽の規則

これ【印璽】によって、王権の三つの柱⁷⁹の各々に関する布令の飾りが行われる。いや、あらゆる集団にとって、【印璽は】職務において欠かせない。【アクバルが】玉座に座した始めの頃は、型彫り人のマウラーナー・マクスード⁸⁰がその業務に従事していた。彼は、鉄の印面の周縁に、【アクバルの】尊いお名前と、サーヒブ・キラーン⁸¹【ティムール】陛下までの高貴なる先祖【の名前】をリカー体で彫り込んだ⁸²。その後、【アクバルの】聖らかなるお名前のみ【を備えた別の印璽】をナスターリーク体で飾った。また、訴願事案のためには【別の印璽を】ミフラーブの形で整え、【アクバルの】至聖なるお名前の周囲に次の詩句を彫り入れた。

詩句：

正しさは神の満足をもたらず 正しき道を失う者は人に非ず⁸³ <I, 48>

79 本書冒頭に挙げられている、「居所の繁栄」「軍の成功」「王国の富裕」を指すと考えられる [AA: I, 7]。本書は、この三つの部門について解説するという構造になっている [AA (Jtr.) (1): 80, n. 9]。 (N)

80 彼については [AA (Jtr.) (2): 80, n. 18] を参照されたい。なお、Humāyūn のデリー奪回時に Akbar に仕えていた人物の中に、「貨幣打刻所のダルガとなった Maqṣūd Damnah」という名前が見られる [THA: 185]。 (N) ただし本文の Mawlānā Maqṣūd と「貨幣打刻所のダルガ」の Maqṣūd を同一人物と見なすための直接の証拠は無い。むしろ後者について THA の当該部分が「スルターンの称号によって引き立てられ」と付け加えていることはネガティブな材料である。さらに DMNH (Damnah ないし Dimnah) の語を、Thackston の新版は Dunbah と作る [THA (T): II, 112]。THA, THA (T) の底本はいずれも、現存する唯一の写本 (IO Islamic 216, British Library) であるが、注釈者はこの写本を参照していないので、この点については判断を下せない。 (M)

81 ムガル帝国の歴史書では、Timūr は一般にこの称号で呼ばれる。 (N)

82 Timūr からムガル帝国今上皇帝までの系譜が記されたムガル帝国期の印璽については [Gallop 1999]。形状としては、円形あるいは正方形であり、中心に今上皇帝、周辺に Timūr から先代の王までの名前が、Timūr を 12 時の位置にして時計回りで配置される例が多い。 (N)

83 韻律は baḥr-i ḥafīf-i musaddas-i sālim wa maḥbūn. -+--- ++-- -+--- (N)

タムキーン⁸⁴が二つ目の【訴願事案用の】印璽を新しく作成した。その後、マウラーナー・アリー・アフマド・ディフラヴィー⁸⁵が、この二つの【用途の印璽の】制作において離れ業を見せた⁸⁶。それらのうち円形の小さいものはウズク(uzūk⁸⁷)と呼ばれ、サブト勅令(farmān-i tabtī⁸⁸)はそれによって威信を得る。大きいものには先祖の高貴なる名前も書いてあり、世界の王たち【への文書】に用いよう定められたが、今日では、両方【の印璽】によって【外交の】業務が輝きを得ている⁸⁹。他の命令書(aḥkāṁ)のためには四角形の印璽があり、「神

84 注89を参照されたい。(N)

85 [AA: I, 18; AA (Jtr.) (1): 103] を参照されたい。(N)

86 本訳注では、この「二つ」を、通常の印璽(TīmūrからAkbarまでの名前が彫られたデザイン、あるいはAkbarの名前のみのデザイン)と訴願事案用の印璽(ミフラーブの形で詩句が彫られたデザイン)の二種類と解釈して訳を作成した。一方、Blochmannは、TīmūrからAkbarまでの名前が彫られたデザインと、Akbarの名前のみのデザインの二種類と解釈している[AA (Etr.): I, 54]。(N)

87 テュルク語で「指輪」を意味する‘üzük’が転じて、ある種の印章を指して用いられるようになったもの[Doerfer 1963-1975: II, 146-147]。ムガル帝国時代の史料上の実例としては、「神は偉大なり Allāh akbar」という文言を印璽に用いることに関するAkbar時代の議論の記録[MT: II 210]、Šāh Ġāhān即位の際、下命書(manšūr)と勅令書(farmān)にはウズク印を押捺するよう決められたこと[BNL: I, 91]、勅令書に押捺されるウズク印が王妃Mumtāz Mahalの許に保管されていたこと[BNL: I, 146]を挙げられる。(N)

上記のごとく、君主発令の勅令書だけでなく、王族が発令する下命書にもウズク印が押捺され得たことは、Ġāhāngīrの証言によって裏付けられる:「王子時代、私は完全な信頼により、自分のウズク印を Amīr al-Umarā’に預けてあった。そして彼にビハール州への辞去の許可を与えた後、私はそれを【王子】Parwīzに預けた。そしてParwīzがRānāを討つ任務のために辞去した今、それは従前のごとく、Amīr al-Umarā’に委ねた」[JN (T): 12 / JN (A): 8]。この記事は、ウズク印の保管者が必ずしも王族とは限らなかったことをも教えているが、その点は、Akbar時代末期(1602年ごろ)、Akbarの勅令書にウズク印を行使したのが有力貴族Āṣaf Ḥān (Ġāfar Bīg)であったこととも符合している[AAB: 2r]。(M)

88 サブト勅令については[AA: I, 194]。ただしそこには、ウズク印の押捺についての記述はない。なお、近藤治はこの語を「登記勅令」と訳している[近藤2003: 327-331]。(N)

89 この文とその直前の文を考え合わせると、ウズク印にはティムール家系譜が刻み込まれていなかったことになる。しかしŠāh Ġāhān即位の際に作成された「至聖のウズク印」は先代Ġāhāngīrの様式を踏襲したもので、中央にŠāh Ġāhānの名を、その周囲に「【Tīmūrに至る】9人の高貴なる父祖たち」を刻み込んだものであった[BNL: I, 91]というから、ウズク印の様式が変更されたのでない限り、このBNLの記事は本書の所伝に整合しないことになる。かくのごとく、ウズク印の様式についてはなお未解決の問題があり、既知の印章の実例のいずれかに特定することは困難である。それゆえAkbarに帰せられる一例をウズクと断定するEsmailiの説には従い難い[Esmaili 2008:

は至大なり。彼の偉大さが高められんことを」と彫られた。寝所の諸事のためには専用の印璽が定められた。勅令の封緘のためには特別の印璽が作られ、幾つかの図像が描かれた⁹⁰。

マウラーナー・マクスード・ハラウィーは、ジャンナト・アーシャーニー⁹¹陛下【フマーユーン】の僕であった。リカー体とナスタアリーク体を良く書いた。アストロラーベと天球儀と数種の定規を、熟練の者たちが驚くようなやり方で作った⁹²。帝王の配慮によって卓越した立場を得て、比類ない存在となった。

タムキーン・カープリー⁹³は、自らの工房で腕を磨き、その技能は、第一の人物【マウラーナー・マクスード】が嫉妬の隘路に入り込むほどの境地に達した。ナスタアリーク体においては彼を凌いだ。

ミール・ドゥースト・カープリー⁹⁴は、瑪瑙をリカー体やナスタアリーク体で飾っていた。【上記の】彼らには及ばないものの、彼のリカー体はナスタアリーク体よりも良かった。また、試金術においても鑑定眼を持っていた。

マウラーナー・イブラーヒーム⁹⁵は、瑪瑙彫刻において、自らの兄弟シャラフ・ヤズディーの弟子であるが、古の巨匠たちの技を超えた。彼のリカー体とナスタアリーク体は、書道家の名品のひとつとして数えないわけにはいかない。ラアリ・ジャラーリーの意匠による帝王の高価なラアル貨は、彼の手によって飾られたものである。

178-179]。(M)

⁹⁰ 勅令の封緘については [AA: I, 196]。(N)

⁹¹ 直訳は「天国にお住まいの御方」であり、第2代君主 Humāyūn の諡号である。ムガル帝国の歴史書に共通して用いられる。(N)

⁹² Sarmaによると、この記述がインドにおける天球儀 (celestial globe) 作成の最初の事例であるが、作成されたものは現存していないという [Sarma 2008: 296]。ムガル帝国期のアストロラーベについては [Sarma 2008: 199-239] を、天球儀については [Sarma 2008: 275-307; Sarma 2011] を、また、ムガル帝国期の絵画に見られる天文器具については [Sarma 2008: 76-121] を参照されたい。(N)

⁹³ 彼については、この項目で後述されている以上の情報は不明である。しかし、この人名を Namakīn と読むなら、Akbar時代の文書集 *Munša'āt-i Namakīn* の著者であり、カーブルで青年期を過ごした Abū al-Qāsim Namakīn (d. 1609-10) である可能性がある。(N)

⁹⁴ 彼については、ここで述べられている以上の情報は不明である。(N)

⁹⁵ 彼については、ここで述べられている以上の情報は不明である。(N)

マウラーナー・アリー・アフマド・ディフラヴィー。鉄【の細工】において彼に匹敵する者はない。この技能において同時代で彼に並ぶ者はないと能書家たちは考え、彼の筆跡を手本にしている。タアリーク体以外にも様々な書体において第一級だが、ナスタアリーク体を特に見事にものする。この生業を、自らの父シャイフ・フサインから受け継ぎ、マウラーナー・マクスードの仕事ぶりを見ることで目覚め、全ての者を超えた。

天幕系の館 (farrāš hānah) の規則⁹⁶

外面と内実にわたる世界装飾者は、この部署 (kār-gāh) を選び出して、寒暑の際の住居・避難所、雨からの護り手、王権の飾りと見なす。またそれに対する装飾を、威令布告の権威と考え、<I, 49> 神の崇拝に擬する。そして、その作法と程度に関する通曉によってそれは増加し⁹⁷、新たな仕様で歓喜の^{かんばせ}顔を煌めかせた。その一端について記し、探求者たちに示すことにする。

謁見場⁹⁸。その大きさといえ、1万人以上がその下に座ることができるほどである。鮮やかな手先の天幕係1000名が1週間かけて、牽引用の器具の力で立ち上げる。多くの場合、これは2本柱であり、柱はそれぞれ、いくつかの鉄板で繋ぎ合わされてできる。錦やベルベットや金を用いていない簡素な戸口でさえ、1万ルピー以上が支出されるので、入念に仕上げられたものの価格は語り尽くすことができない。これからの類推によって、他の物の実情は知られよう。

木製ラーワティー (ラー、アリフ、ワーウのファトゥハ、ヒンド語の上双点

⁹⁶ 天幕係 (farrāš) は [AA: I, 42; 本訳注121頁] に既出。(M)

⁹⁷ Ms. B は 'afzūdah and' と補うが [AA Ms. B: 33v/4] 採らない。(M)

⁹⁸ 「謁見場」はグラールバールの中にある「謁見場」[AA: I, 41] と内廷の中にある「大謁見場」[AA: I, 42] とが既出。「2本柱」であるという点では前者に符合するが、24ガズ×14ガズ (およそ19m×11m) という前者の規模は、この箇所の説明が示唆する巨大な規模にそぐわない。それゆえこの箇所の「謁見場」は内廷の「大謁見場」を指していると考えたい。(M)

付きター、下双点付きのヤーのスクーン)。これは10本の柱で建ち上がる。それらの柱はいずれもその一部が地中に埋め込まれており、高さはどれも同じであるが、棟木 (tīr) が上に落ち着く2本だけは少し高い。上方・下方の横材 (dāsah) によって強度が増し、いくつかの垂木 (tarak) が棟木と横材の上に乘せられる。これらすべてを鉄板がほぞ組で (bi-ṭarz-i nar wa mādah-gī) 繋ぎ合わせている。側壁 (dīwār) と屋根は編んだ葦を下地にする。出入口は一つないしは二つ設けられ、下方の横材の大きさに合わせて、基壇 (ṣuffah) が築かれる。内側は錦とベルベットで飾られており、外側は毛・絹でできた帯をめぐらせてある。

二階建て居館。これは18本の柱で建ち上がる。高さ6ガズ の柱が立てられ、板の間にしつらえられる。そしてその上にはほぞ組で4ザルウ (ḡar') の高さの柱が繋ぎ合わされて、上層階が出来上がる。内側と外側は【木製ラフティーと同じ】その仕方で飾りつけられる。移動中には、幸福なる寝所としてととのえられる。この神聖なる居館は、精神界と外界に通じた賢者に似ている。その一方は神聖の私室に面しており、もう一方は衆人のための装飾された館に面している。神への崇拝はこの歓びの家で行われ、至高の太陽への称賛はここから始められる。その後、至高の後宮の帳の人びとが、お目見えの希望を叶えられる。そのうえで表の人びとがお目見えの儀によって幸福を獲得する。巡行の間、定例のお目見えは、大部分がこの居館で行われる。【この居館は】ジャローカー (ḡharōkah⁹⁹) (ジームのファトゥハ、隠れたハー、ラーのオー発音ダンマ、ワーウのスクーン、カーフのファトゥハ、隠れたハー) と呼ばれている。

ザミン・ドゥーズ (zamīn dūz)。これはいろいろな仕様で建てられる。1本柱のものもあれば、2本柱のものもある。複数の帳を内部に掛けて、段階ごと

99 ジャローカーはサンスクリット語起原の言葉で、屋根と柱を伴う出窓のこと。ムガル帝国期には、この形式の窓から皇帝が人々に姿を見せる儀式が行われた。Akbarがファトゥフブル・スィークリーでジャローカーの儀式を行ったのは、ダフタル・ハーナと呼ばれる建物のジャローカーからであったと推察されている [Koch 1991: 58, 109, 140]。(N)

に分ける。<I, 50>

アジャーイビー (‘ağā’ibī)。9枚の覆い布 (šāmyānah) が4本の柱で建てられる。四辺形のものが5枚と円錐形のものが4枚である。一体につくられることもある。【その場合は】1本の支柱で立てられる。

マンダル (mandal) (ミームのファトゥハ、隠れたヌーン、ヒンド語のダールのファトゥハ、ラームのスクーン)。つなぎ合わされた5枚の覆い布である。4本の柱で建てられる。時には四方に【覆いを】下ろして私的な空間 (ḥalwat-kadah) とし、時には四方【の覆い】をどれも引き上げる。また時には一方だけを引き上げて交歓できるようにする。

8本柱 (aṭh khanbha) (ヒンド語の上双点付きター、隠れたハー、カーフのファトゥハ、隠れたハー、ヌーンのスクーン、隠れたヌーン、バーのファトゥハ、隠れたハー) は、17枚の覆い布が別々に、またつなぎ合わされて整えられる。8本の柱で建てられる。

天幕 (ḥargāh) はさまざまな仕様で建てられる。入口が一つのものや二つのものがある。

覆い布は色々あるが、【その大きさは】12ガズ以上にはならない。

カラダリー。その説明は既に終えた。

帳 (sarā-pardah)。以前は、粗い布 (ābaftah) で作られていたが、世界の王はそれに絨毯 (gilīm-ī) を用いている。【後者の方が】権威が増し、より実用的である。

グラールバールは、木製の帳である。天幕の側壁と同様に、革ひもで締める。撤去するときにはまとめられる。赤い布裂を張っており、真ん中に帯をめぐらせてある。

絨毯 (gilīm)。世界の王は素晴らしい模様を考案し、心をほどくような結び目を作らせた。経験豊かな (āzmūn-kār) 親方たちを指名し、名品の数々を製作させた。【そのため】イーラーンやトゥーラーンの絨毯は人々の記憶から忘れ去ら

れてしまった。毎年クーシュカーン (Kūškān¹⁰⁰) やフーズイスターン (Hūzistān) やキルマーン (Kirmān) やサブザワール (Sabzawār) などから商人たちが持ってきてはいるのだが。どのような集団も絨毯工房をつくっていて、大きな利益を得ている。アーグラ、ファトゥフブル、ラホールという帝都 (šahr-i ḥāṣṣah) のいずれにおいても、拔群のものが生産されてきた¹⁰¹。そして御用の宮内作業所 (kāḥ-ḥānah-i ḥāṣṣ) では、長さ 20 ガズ 7 タッスージュ (ṭassūḡ¹⁰²)、幅 6 ガズ 11.5 タッスージュの一枚ものの絨毯が作られている。【それには】 1810 ルピーが費やされたが、技の【価値を】 分かる者たちは 2715 ルピーと値踏みした。<I, 51>

タクヤ・ナマド (takyah namad)。これは遠国 (wilāyat¹⁰³) からもたらされるが、この国 (marzūbūm) の中でもたくさん作られる。

ジャージム (ḡāḡim) やシャトランジ (šaṭraṅṭī) やバルーチー (balūcī)、そして絹で織られている素晴らしいマットの数々が残っているが、説明がたいそう長くなるのでどうにも書くことができない。

100 底本には Gūškān とあるが、その読みを改めた [Ms. A: 25v; Ms. B: 34r]。これは Ġawšaqān に同じであり [Dihḡudā: Kūškān]、Ġawšaqān は Kāšān の南西およそ 100 キロメートルに位置する地方およびその中心地を指す。この地方は絨毯生産によって知られ、サファヴィー朝時代には王立の工房もこの地に設けられた [Borjān (Elr) Jowšaqān]。(M)

101 この文については、異読があることが底本の注に示されている。すなわち、'har šahr-i ḥāṣṣah Āgrah wa Fathpūr wa Lāhawr guzīdah-tar šud' と、底本のテキストで har の前にある前置詞 dar を欠いている。それに従うとこの文は「アーグラ、ファトゥフブル、ラホールという帝都のいずれもが抜きん出るに至った」と解することができる。(M)

102 タッスージュは長さの単位としては、[AA: I, 295] に説明がある。それによると、4 タッスージュが 1 ダーング、6 ダーングが 1 ガズに相当するとされている。したがって、1 タッスージュ = $1/24$ ガズになる。なお、重さの単位としてのタッスージュについて記した [AA (Jtr.) (2): 99, n.76] で tassūḡ とあるのは誤植である。(W)

103 wilāyat は、この頃のインドのペルシア語文献では国外、とくに中央アジア乃至西アジア方面の諸地域を指す。JN に、このような wilāyat の用法の例が見られる。「メロン、マンゴー、その他の果物がアーグラとその近郊でよく実る。私は果物の中ではとりわけマンゴーを好む。アルシュ・アーシャーニー陛下 (ḡadrat-i 'arš-āšyānī) [Akbar] の御世には、インドの中になかった wilāyat のより多くの果物が得られた」[JN (T): 4/ JN (A): 3]。(W)

参考文献

一次文献

- AA: Abū al-Faḍl, *Ā'in-i Akbarī*. H. Blochmann (ed.), Calcutta, 2 vols., 1867-1877.
- AA D.: do. Sayyid Ahmad Khan (ed.), Delhi, 1272 AH (repr. 'Aligarh, 2005).
- AA L.: do. Sayyid Ahmad Khan (ed.), 3 vols., Lakhna'ū, 1869.
- AA Ms. A: Ms. Add. 7652, British Library.
- AA Ms. B: Ms. Or. 2169, British Library.
- AA (Etr.): H. Blochmann (vol. 1) & H.S. Jarrett (vols. 2, 3) (trs.). (Rev. ed. D. C. Phillott & J. Sarkar), Calcutta, 3 vols., 1927-1949.
- AA (Jtr.) (1): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (1)」『紀要 (神戸大学文学部)』40, 2013, pp. 69-118.
- AA (Jtr.) (2): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (2)」『紀要 (神戸大学文学部)』41, 2014, pp. 75-120.
- AAB: Asad Bīg Qazwīnī, *Aḥwāl-i Asad Bīg*. Ms. Fann-i Sawānīh-i 'Umrī 41, Andhra Pradesh Government Oriental Manuscripts Library and Research Institute.
- AIN: Muḥammad Kāzīm, *'Ālamgīr Nāmāh*. Mawlawī Ḥādīm Ḥusayn & Mawlawī 'Abd al-Ḥayy (eds.), 2 vols., Calcutta, 1865-1868.
- AN: Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmāh*. Mawlawī Āghā Aḥmad 'Alī & Mawlawī 'Abd al-Raḥīm (eds.), 3 vols., Calcuttah, 1877-1886.
- Bernier: François Bernier, *Voyages de François Bernier docteur en medecine de la faculte de Montpellier contenant la description des etats du Grand Mogol, de l'Indoustan, du Royaume de Cachemire, etc.* F. Tinguely, A. Paschoud & Ch.-A. Chamay (eds.), *Un libertin dans l'Inde Moghole: Les voyages de François Bernier (1656-1669)*, Paris, 2008.
- Bernier (Jtr.): 関美奈子・倉田信子訳『ムガル帝国誌』岩波書店、1993.
- BKh: Anonym., *Bayāḍ-i Ḥwūš-bū'ī*. Ms. British Library, IO Islamic 828.
- BN: Ḥāḥir al-Dīn Muḥammad Bābur, *Bābur Nāmāh*. 間野英二編『バーブル・ナーマの研究 I 校訂本』松香堂、1995.
- BN (Jtr.): 間野英二訳『バーブル・ナーマの研究 III 訳注』松香堂、1998.
- BNL: 'Abd al-Ḥamīd Lāhawrī, *Pādshāhnāma*. Kabīr al-Dīn Aḥmad & 'Abd al-Raḥīm (eds.), 2 vols., Calcutta, 1866-1868.
- Careri: Giovanni Francesco Gemelli Careri, *Giro del mondo*. 6 vols., Napoli, 1699-1700.
- Careri (Etr.): S. Sen (tr.), *Indian Travels of Thevenot and Careri*, New Delhi, 1949.
- DAA: Anonym., *Dastūr al-'Āmal-i 'Ālamgīrī*. Ms. British Library, Add. 6598 I.

- FJ: Mīr Ġamāl al-Dīn Ḥusayn Inġū, *Farhang-i Ġāhāngīrī*. 3 vols., Mašhad, 1351 Sh.
- GM: Anonym, *Ġunyat al-Munyah*. S. Sarmadee (ed.), Bombay, 1978.
- HN: Gul-badan Bīgim, *Humāyūn Nāmah*. A. S. Beveridge (ed. & tr.), London, 1902.
- IB: Ibn Baṭṭūṭah, *Tuḥfat al-Nuẓẓār fī Ġarāʾib al-Amṣār wa ʿAġāʾib al-Aṣfār*. C. Defrémery & B. R. Sanguinetti (eds. & trs.), *Voyages d'Ibn Battūta*, 4 vols., Paris, 1853-1859.
- IB (Jtr.): 家島彦一訳『大旅行記』平凡社, 8 vols., 1996-2002.
- INJ: Muʿtamad Ḥān, *Iqbāl Nāmah-i Ġāhāngīrī*. Lakhnaʾū, 1870.
- JJ: al-Bīrūnī, *Kitāb al-Ġamāhīr fī Maʾrifat al-Ġawāhīr*. Yūsuf al-Hādī (ed.), Tihṙān, 1374 Sh.
- JJ (tr.): H. M. Said (tr.), *Al-Beruni's Book on Mineralogy: The Book Most Comprehensive in Knowledge on Precious Stones*, Islamabad, 1989.
- JN (A): Nūr al-dīn Muḥammad Jahāngīr, Syud Ahmud Khan (ed.), Ghazeepore & Ally Gurh, 1863-1864.
- JN (T): do., *Jahāngīr Nāmah*. Muḥammad Hāšim (ed.), Tihṙān, 1359 Sh.
- JN (Etr.) (Rogers): A. Rogers (tr.), H. Beveridge (ed.), London, 1909-1914.
- JN (Etr.) (Thackston): W. M. Thackston (tr.), Washington, D.C. & Oxford, 1999.
- MAI: Mustaʾidd Ḥān, *Maʾāṭir-i ʿĀlamgīrī*. Āġā Aḥmad ʿAlī (ed.), Calcutta, 1870-1873.
- Manucci: Nicolò Manucci, *Storia del Mogol*. W. Irvine (tr.), 4 vols., London, 1907-1908.
- MKŞ: Šaraf al-Dīn Aḥmad b. Yaḥyā Manērī, *Maktūbāt-i Šadī*. Facsimile edition, Patna, 1994.
- MKŞ (Etr.): do. P. Jackson (tr.), *Letters from Maneri: Sufi Saint of Medieval India*. Mahwa, 1980.
- Monserrate: Antonio Monserrate, *Mongolicae Legationis Commentarius*. H. Hosten (ed.) 'Jesuit Letters and Allied Papers on Mogor, Tibet, Bengal and Burma, Part I: Mongolicae Legationis Commentarius', *Memoirs of the Asiatic Society of Bengal*, 3(9), 1914, pp. 513-704.
- Monserrate (Jtr.): 清水廣一郎・池上岑夫訳「ムガル帝国誌」『ムガル帝国誌・ヴィジヤナガル王国誌』岩波書店 1984, pp. 3-223.
- MT: ʿAbd al-Qādir Badāʾunī, *Muntaḥab al-Tawārīḥ*. Mawlawī Aḥmad ʿAlī Šāḥib & Kabīr al-Dīn Aḥmad (eds.), 3 vols., Calcutta, 1864-1869.
- Mundy: Peter Mundy, [*The Travels of Peter Mundy in Europe and Asia, 1608-1667*]. R. C. Temple & L. M. Anstey (eds.), 5 vols., London, 1907-1936.
- QH: Ḥwāndamīr, *Qānūn-i Humāyūnī*. Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (ed.), Calcutta, 1940.
- Roe: Thomas Roe, [*The Embassy of Sir Thomas Roe to the Court of the Great Mogul, 1615-1619, as Narrated in his Journal and Correspondence*]. W. Foster (ed.), 2 vols., London, 1899.
- Sanglāḥ: Mīrzā Mahdī Astarābādī. *Sanglāḥ*. Tihṙān, 1374 Sh.
- TA: Nīẓām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī*. B. De & Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (eds.), 3

- vols., Calcutta, 1913-1941.
- TAK: Muḥammad ‘Ārif Qandahārī, *Tārīḥ-i Akbarī*. Sayyid Mu‘īn al-Dīn Nadwī et al. (eds.), Rampur, 1962.
- TAN: Unknown, *Takmilah-i Akbar Nāmah*. Mawlawī Āghā Aḥmad ‘Alī & Mawlawī ‘Abd al-Raḥīm (eds.), *Akbar Nāmah*, Calcutta, vol. III, 1886, pp. 802-843.
- Terry: Edward Terry, *A Voyage to East-India*. W. Foster (ed.), *Early Travels in India*, 1583-1619, London, 1921, pp. 288-332.
- TFSB: Ḍiyā’ al-Dīn Baranī, *Tārīḥ-i Fīrūz Šāhī*. S. A. Khan (ed.), Calcutta, 1862.
- THA: Bāyazīd Bayāt, *Tadkirah-i Humāyūn wa Akbar*. Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (ed.), Calcutta, 1941.
- THA (T): do. W. M. Thackston (ed. & tr.), *Three Memoirs of Humayun*, 2 vols. in one, Costa Mesa, 2009.
- TR: Ḥaydar Mīrzā, *Tārīḥ-i Rašīdī*. ‘Abbās-Qulī Ġaffārī Fard (ed.), Tihārān, 1383 Sh.

二次文献

- Ando, S. (1992) *Timuridische Emire nach dem Mu‘izz al-ansāb: Untersuchung zur Stammesaristokratie Zentralasiens im 14. und 15. Jahrhundert*, Berlin.
- Andrews, P. A. (1999) *Felt Tents and Pavilions: The Nomadic Tradition and its Interaction with Princely Tentage*, 2 vols., London.
- Andrews, P. A. (EI2) Miẓilla (4. In the Persian, Indian and Turkish lands). *Encyclopaedia of Islam*, New Edition.
- Beach, M. C. (1985) Mughal Tents. *Orientalia*, 16, pp. 32-43.
- Beach, M.C. & Koch, E. (1997) *King of the World: The Padshahnama, an Imperial Mughal Manuscript from the Royal Library, Windsor Castle*. London.
- Beveridge, A. S. (1902) *The History of Humāyūn (Humāyūn-Nāma)*. By Gul-badan Begam (Princess Rose-body), London.
- Borjān, H. (EIr) Jowšaqān i. The District. *Encyclopædia Iranica*, XV/1, pp. 77-79; available online at <http://www.iranicaonline.org/articles/jowsaqan-i-district> (accessed on 5 November 2014).
- Clauson, G. (1982) *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford.
- Dihḥudā, A. A. *Luḡat-nāmah*. <http://www.loghatnaameh.org/>
- Doerfer, G. (1963-1975) *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen. Unter besonderer Berücksichtigung älterer neupersischer Geschichtsquellen, vor allem der Mongolen- und Timuridenzeit*, 4 vols., Wiesbaden.
- During, J. (EIr) Dawr (2). *Encyclopædia Iranica*, VII/2, pp. 153-159; available online at <http://>

- www.iranicaonline.org/articles/dawr-2 (accessed on 25 October 2014).
- During, J. (EI^r) Forūd (1). *Encyclopædia Iranica*, XI/1, pp. 106-107; available online at <http://www.iranicaonline.org/articles/forud-1> (accessed on 25 October 2014).
- During, J. (EI^r) Guša. *Encyclopædia Iranica*, XI/4, pp. 404-405; available online at <http://www.iranicaonline.org/articles/gusa> (accessed on 25 October 2014).
- During, J. (EI^r) Homāyūn. *Encyclopædia Iranica*, XII/4, p. 437; available online at <http://www.iranicaonline.org/articles/homayun> (accessed on 25 October 2014).
- Esmaili, M. (2008) *Chancellery System and its Sigillography: During the Contemporaneous Reigns of the Safavids in Iran & the Great Mughals in India*, New Delhi.
- Farmer, H. G. (EI2) Ṭabl-khāna. *Encyclopaedia of Islam. New Edition*.
- Feldman, W. (EI2) Mehter. *Encyclopaedia of Islam. New Edition*.
- Gallop, A. T. (1999) The Genealogical Seal of the Mughal Emperors of India. *Journal of the Royal Asiatic Society (Third Series)*, 9(1), pp. 77-140.
- Gonda, J. (1956) Ancient Indian Kingship from the Religious Point of View (continued). *Numen*, 3(2), 1956, pp. 122-155.
- Grieg, J. A. (1987) *Tarikh-i Sangita: The Foundations of North Indian Music in the Sixteenth Century*. Ph.D. diss., University of California, Los Angeles.
- Habib, I. (1999), *The Agrarian System of Mughal India 1556-1707*. Second Revised Edition. New Delhi.
- Irvine, W. (1903) *The Army of the Indian Moghuls: Its Organization and Administration*, London.
- Jackson, P. (1987) *The Way of a Sufi: Sharafuddin Maneri*, New Delhi.
- Jackson, P. (1990) Introduction. In P. Jackson (tr.), *Letters from Maneri, Sufi Saint of Medieval India*. Mahwah, 1980 (reprint, New Delhi, 1990).
- Khan, M. A. & Ram, S. (2003) *Encyclopaedia of Sufism, vol. 11: Early Sufi Masters: Sharafuddin Maneri and Abdullah Ansari*. New Delhi.
- Lambton, A. K. S. (EI2) Naḳḳāra-khāna. *Encyclopaedia of Islam. New Edition*.
- Koch, E. (1991) *Mughal Architecture: An Outline of Its History and Development (1526-1858)*, Munich.
- Ninomiya, A. (2006) Analyzing Sufism/ Tasawwuf in 16th Century India: The Case of Bada'uni's *Najat al-Rashid*. *Proceeding of the Indian History Congress, 65th Session*, pp. 345-349.
- Pavet de Courteille, A. (1870), *Dictionnaire Turk-oriental*, Paris.
- Platts, J. T. (1884) *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī and English*, Oxford.
- Sarma, S. R. (2008) *The Archaic and The Exotic: Studies in the History of Indian Astronomical Instruments*, New Delhi.

- Sarma, S. R. (2011) A Bilingual Astrolabe from the Court of Jahāngīr. *Indian Historical Review*, 38(1), pp. 77-117.
- Sharma, K. (2009) A Visit to the Mughal Harem: Lives of Royal Women. *South Asia: Journal of South Asian Studies*, 32(2), pp. 155-169.
- Subtelny, M. E. (2007) *Timurids in Transition: Turko-Persian Politics and Acculturation in Medieval Iran*, Leiden.
- Seyller, J. (2002) *The Adventures of Hamza: Painting and Storytelling in Mughal India*. London.
- Sims, E. (Elr) Čatr. *Encyclopædia Iranica*, V/1, pp. 77-79; available online at <http://www.iranicaonline.org/articles/catr-parasol-or-umbrella-an-attribute-of-royalty-in-iran> (accessed on 25 October 2014).
- Stronge, S. (2002) *Painting for the Mughal Emperor: The Art of the Book 1560-1660*, London.
- Taft, F. H. (1994) Honor and Alliance: Reconsidering Mughal-Rajput Marriages. In K. Schomer, J. L. Erdman, D. O. Lodrick & L. I. Rudolph (eds.), *The Idea of Rajasthan: Explorations in Regional Identity: Volume II: Constructions*, New Delhi, pp. 217-241.
- Wade, B. C. (1998) *Imaging Sound: An Ethnomusicological Study of Music, Art and Culture in Mughal India*, Chicago.
- Welch, S. C. (1985) *India: Art and Culture: 1300-1900*. New York.
- Сулаймон, X. (1970) *Бобирнома расмлари*, Тошкент.
- 近藤治 (2003) 『ムガル朝インド史の研究』 京都大学学術出版会.
- 谷正人 (2007) 『イラン音楽：声の文化と即興』 青土社.
- 柘植元一 (1992) 『シルクロード楽器の旅』 音楽之友社.
- 真下裕之 (1999) 「Akbar Nāmāh と Ṭabaqāt-i Akbarī: maṇṣab 制度史研究序説」『西南アジア研究』 51, pp. 43-74.
- 間野英二 (2001) 『パープルとその時代 パーブル・ナーマの研究 4 研究篇』 松香堂.
- 和田郁子 (2002) 「マスリパトナムのハヴァールダール：17世紀前半ゴールコンダ王国の交易港支配に関する一考察」『西南アジア研究』 57, pp. 45-66.
- 和田郁子 (2006) 「インド・ゴールコンダ王国の港市マスリパトナム：一七世紀前半のオランダ商館の日記を中心に」 歴史学研究会編『港町の世界史 3 港町に生きる』 青木書店, pp. 151-177.